

「LGBT」 という現象

—失われた主体性、カテゴリーが見えなくしたもの—

13SG1015
池上桃子

目 次

目 次 . . . i

第1章 問いの背景 . . . 1

第2章 日本における「LGBT」 . . . 2

2-1 LGBT の概要 . . . 2

2-2 新聞記事から見るセクシュアルマイノリティに関する語句の変遷 . . . 3

2-3 日本における「LGBT ブーム」の背景 . . . 6

2-4 リサーチクエスチョン . . . 8

第3章 インタビュー調査 . . . 10

3-1. 調査の概要 . . . 10

3-2. Aさん（レズビアン 20代）. . . 10

3-3. Bさん（レズビアン 40代）. . . 17

3-4. Cさん（FtM 20代）. . . 26

3-5. Dさん（セクシュアルマイノリティの支援者）. . . 36

3-6. インタビュー総括 . . . 46

3-5-1 「LGBT ブーム」について . . . 46

3-5-2 「LGBT」というカテゴリーは何をもたらしたか . . . 47

3-5-3 レズビアンの不可視性 . . . 48

3-5-4 「アライ」の可能性 . . . 53

3-5-5 セクシュアリティとアイデンティティ . . . 54

3-5-6 寛容性概念について . . . 55

第4章 結論 . . . 57

4-1. カテゴリーをこえて－「LGBT」の功罪 . . . 57

4-2. 寛容性の罠をこえて . . . 58

4-3. 残された課題 . . . 60

注 . . . 60

参考文献 . . . 62

第1章 問いの背景

若者をターゲットとしたカルチャー誌『東京グラフィティ』は、2015年10月号で「LGBT COUPLES@渋谷」と題して全15組の多様なセクシュアリティのカップルを大きく紹介した。同性パートナーシップ条例が公布された渋谷区を舞台に写真付きのインタビューとともに敢行された「LGBTカップル」の記事は、多様な性を「自分らしく」生きる幸福感をアピールしたものだった。若者向けの人気雑誌にここまで大々的に取り上げられる「LGBT」は、当事者を指す言葉というよりは「流行の」言葉であるようだった。

私が「LGBT」という言葉を初めて認識したのは2015年の秋頃である。グザヴィエ・ドラン監督の『わたしはロランス』という映画の話題をした時、友人は私に「それってLGBT系の映画だよね」と言った。確かにこの映画では、美しく情熱的な女性フレッドと「僕は女になりたい」と告白したロランスの激しい葛藤やすれ違い、周囲の偏見や社会の拒否反応などが描かれる。私はこの映画を二人の人生における直向きな人間ドラマだと解釈していた。だが、「LGBT系」の枠組みの中でストーリーを認識した瞬間に二人の葛藤はセクシュアルマイノリティにおける差別や抑圧などの社会問題からくるものとして簡単に言い表すことができるようになり、そこで描かれる人間の普遍的な相互行為やディスコミュニケーションが不可視化されてステレオタイプの物語に回収されてしまうような感覚に陥った。例えば、二人がカフェに出掛けた時、女装したロランスに向かってウェイターが「変わってるわね、趣味でやってるのかしら。人目を楽しんでるの?」と冷やかし、それを聞いたフレッドが怒り狂うというシーンがある。このシーンで印象的なのはウェイターのよくある軽い冷やかしにフレッドが過剰に反応し、激怒しているところである。つまり、フレッドの怒りの矛先はそのウェイターだけではなかったはずだ。二人を取り巻く社会の抑圧、母親とのディスコミュニケーション、「変わった」人を不信や好奇の目で見る田舎町の視線、ロランスとの意見のすれ違いなど、これまで描かれてきた様々なストレスが要因であるだろう。これらは決して「LGBT」であることだけが原因なのではない。劇中でロランスが「トランスジェンダー」や「性同一性障害」、「レズビアン」などと名付けられることはない。それはこの映画が「トランスジェンダーであるロランス」の葛藤の物語ではなく、一人の「ロランス」という人間にまつわる物語だということを暗に示しているだろう。実際、監督のグザヴィエ・ドランはインタビューで『わたしはロランス』は、トランスジェンダーの物語じゃない、ラブストーリーなんだ」と述べている(2013)。

以降、映画ジャンルのひとつに「LGBT」というカテゴリーが出現し、「LGBT」を題材にした映画が数多く制作されている。そこで、「LGBT」映画とされるものを観客が無条件に「差別はよくない」といった単略的な帰結で片付け、それ以降の思考を停止していることに私は違和感を抱いた。

近年、日本では「LGBT」という言葉が広く浸透し始め、「はやって」いるように見える。だがそれは当事者による訴えや運動によってではなきそうだ。そして、「LGBT」は単にセクシュアルマイノリティの人々を指す言葉であるだけではなく、マイノリティ（＝社会的弱者）を「多様性」をもって「受け入れよう」といった考え方を強要する権力が含まれているのではないだろうか。そして、多様であったはずのセクシュアリティを「LGBT」とひとまとめにすることで、その集団を同一視し、さらなる不可視性を生みだしてはいないだろうか。本論文はそういった「LGBT」というカテゴリーにまつわる現象について考察するものである。第2章では、「LGBT」という言葉の概要、日本における広まり、「LGBT ブーム」と呼ばれる背景を、データを引用しながら述べている。第3章では当事者やそれにまつわる方へのインタビュー調査をもとに考察を行い、第4章の結論へ結びつけている。

第2章 日本における「LGBT」

2-1. LGBT の概要

「LGBT」とは、L=Lesbian（レズビアン）、G=Gay（ゲイ）、B=Bisexual（バイセクシャル）、T=Transgender（トランスジェンダー）の頭文字をそれぞれとったセクシュアルマイノリティの一部分の総称である。LGBT 概念が登場するまで長く使われてきた「セクシュアルマイノリティ」は、多数派に対して社会的弱者としての少数派といった否定的なニュアンスをもつ用語であった。これに対し、「LGBT」は当事者の主体的な名乗りとして活動家（アクティビスト）を中心にアメリカで登場したものである⁽¹⁾。

当初は、未曾有の「エイズ禍」を経験したゲイ・コミュニティが牽引する形で GLB という概念が生み出され、これを自称することで共有される問題を告発し、連帯を示した。その後、より不可視化された存在である女性が先頭になるように順番を入れ替え、LGB を名乗るようになった。T が追加されたのは（単体では八〇年代から使用されていたが）一番後で、九〇年代前後のことである（東 2016:67）

「LGBT」は解放運動のアクティビストを中心に広まり、公的な文書で初めて使われたのは 2006 年の「レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの人権についてのモントリオール宣言」である。その後、数多くの研究と共に社会の注目を浴び、ホワイトハウスでは「LGBT」についての特設ページを設け、国連では現在でもこれを採用している。

「LGBT」という簡易的に分類された概念はわかりやすく、浸透しやすいものだっただろう。「LGBT」という概念が広く普及することで連帶ができ、多くの当事者がそこに身を寄せ、助け合うきっかけにもなった。LGBT 交流会や LGBT 電話相談が開設し、ロサンゼルスには LGBT 若年ホームレスシェルターという施設も建設された（牧村 2015:72）。

「LGBT」という言葉が浸透したことによって、その存在の可視化、さらに連帶の強化がなされた。しかし、カテゴリーが生まれるということは同時に様々な問題を引き起こすことも留意しなければならないだろう。「LGBT」からこぼれ落ちるセクシュアリティがあることは早くから欧米で指摘されてきた（三橋 2015:第 16 段落）。このように「誰」に焦点化した主体的な名乗りとしての LGBT でさえも、そこから排除される存在を強く意識せざるをえない潜在的暴力性があるということには注意しておかなければならぬ（東 2015:67）。吉野鞆は、先の衆院選で「○○は LGBT フレンドリーだから応援しよう」などの呼びかけが活動家によって促されたが、それのみで政治家を選ぶことはできないし、「性的マイノリティ」であっても「LGBT の枠に入れられる感じ」には馴染めない者もいるため、現時点ではカッコ外しで「LGBT」を扱うことはできないと述べている（吉野 2015:156）。

2-2. 新聞記事から見るセクリュアルマイノリティに関する語句の変遷

では日本において「LGBT」を始めとするセクシュアルマイノリティに関連する言葉がどのように浸透してきているのか。以下、実際の新聞記事からそれぞれの語句が掲載された回数を数値化してみる。

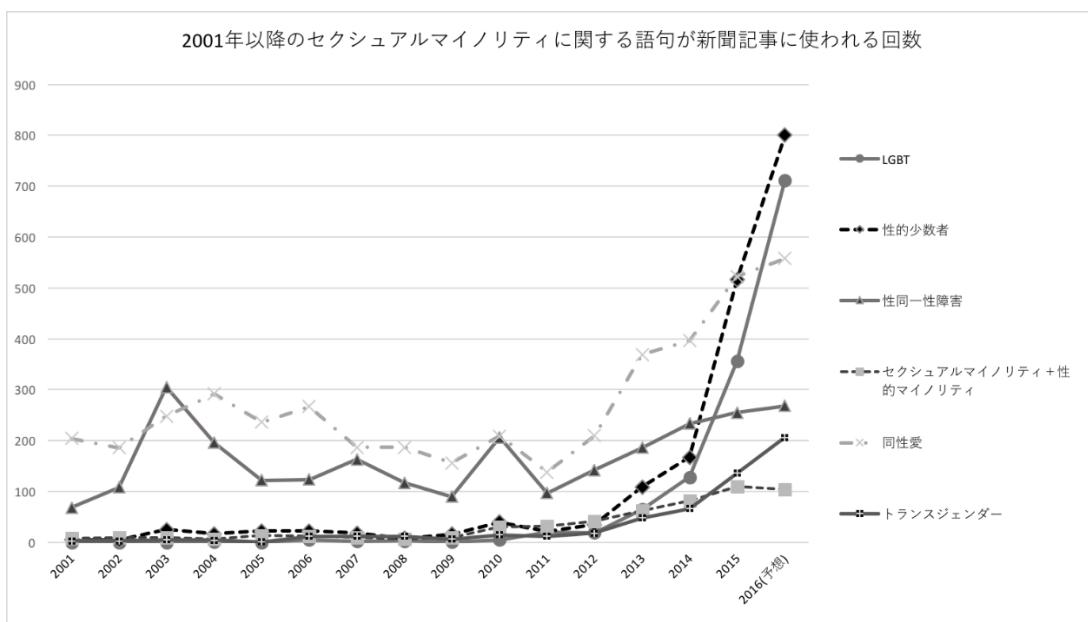


図1 新聞記事におけるセクシュアルマイノリティに関する語句の掲載回数：(出典)筆者作成

図1は、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の2001年から現在までのセクシュアルマイノリティに関する語句が入っている記事の件数を検索し、グラフにしたものである（2016年は3月から8月の半年分の件数を2倍にしたものであるため、予想数値である）。これを見ると、セクシュアルマイノリティに関する語はこの15年間に全体的に上昇傾向にあるとともに、「LGBT」の使用頻度が飛躍的に増大していることがわかる。2001年にテレビドラマで取り上げられたことで世間に広まった「性同一性障害」は、特例法⁽²⁾が施行された2003年に特に頻出している。その後2011年までは減少傾向にあった「性同一性障害」「同性愛」は「LGBT」「性的少数者」と共にここ数年で増大している。これらの数値の伸びから、セクシュアルマイノリティに関する事柄がここ数年、日本社会の注目を得てきたのがわかる。

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
LGBT	0	0	0	1	0	5	2	3	1	5	20	19	65	128	356	712

表1 新聞記事における「LGBT」掲載回数：(出展)筆者作成

さらに表1を見ると、「LGBT」は2011年頃から徐々に使われ始め、2013年からは現在に至るまで年を重ねるごとにほぼ倍に数を伸ばしてきていることがわかる。「LGBT」はここ数年で急速に日本社会に広まった言葉なのである。

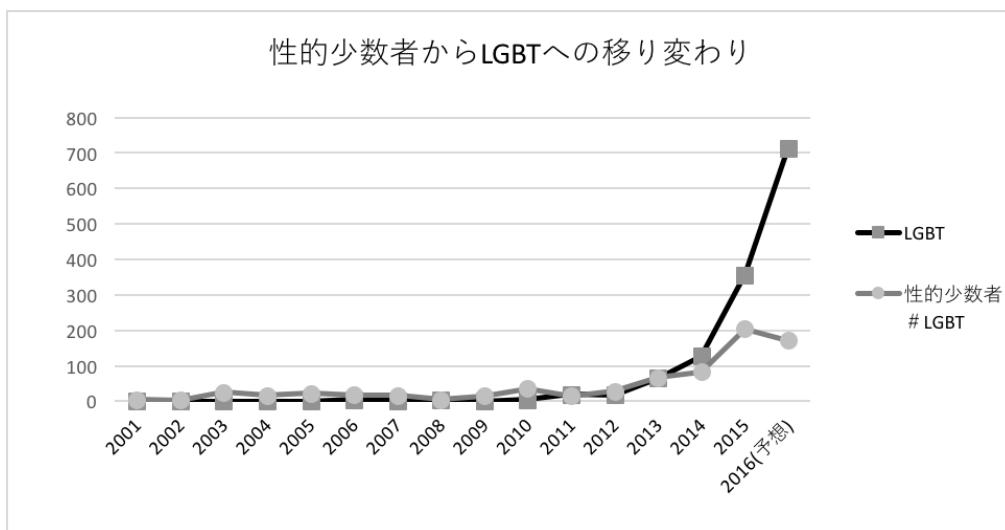


図2 「性的少数者」から「LGBT」へ：(出典)筆者作成

図2は先ほどのグラフから項目を「LGBT」と「性的少数者」だけに絞り、さらに「性的少数者」については「LGBT」を含まない記事（図中では、「性的少数者#LGBT」）だけを検索した結果である。つまり、「LGBT」の説明として記述される「性的少数者」の数を省き、単純にセクシュアルマイノリティを指す語として使われた数だけを抽出したものである。すると2013年からは「LGBT」が「性的少数者」を上回り、言葉として性的少数者が「LGBT」に代替したということがわかる。「LGBT」という語はもはや、当事者だけでなく「多数派」が使う言葉として浸透しているといえるだろう。

これだけ急速に「LGBT」が使われ、「性的少数者」に取って代わる単語になったことは、「LGBTブーム」と呼ぶべき現象を表すだろう。新聞のように限られた紙面でより多くの情報を伝えるには「LGBT」という言葉はとても便利なものだったことも理由だったかもしれない。そのような「LGBT」の言葉としての利便性という特徴も相まってこれだけ広く使われるようになったのだろう。

ちなみにそれぞれの新聞社が定義する「LGBT」とは以下のようなものである。

(朝日新聞 2016.6.12)

「<LGBT> レズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（性同一性障害などで、心と体の性が一致しない人）の頭文字に由来し、性的少数者を意味する」。

(毎日新聞 2016.5.21)

「◇LGBT レズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセク

シュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（性同一性障害者ら心と体の性が異なる人）の英語の頭文字をとった性的少数者の総称。2017年度から高校家庭科の教科書で、法的に婚姻が認められていないカップルの結婚式が取り上げられるなど、社会の理解が少しずつ進んでいる」。

（読売新聞 2016.8.19）

「レズビアン（L、女性同性愛者）、ゲイ（G、男性同性愛者）、バイセクシュアル（B、両性愛者）、トランスジェンダー（T、心と体の性が一致しない人⁽³⁾）の頭文字をとった単語で、性的少数者の総称の一つ」。

2-3. 日本におけるブームの背景

日本の新聞記事において、LGBT を始めとするセクシュアルマイノリティに関する語句がここ数年で飛躍的に使われてきた。「LGBT」というキーワードが『旬』になりつつあるのでは」という見解もある（松中 2015:176）。実は、ここ4,5年の間に「LGBT ブーム」と呼ばれる現象が企業も含め様々な領域で巻き起こっている（砂川 2015:100）のだ。

日本で「LGBT」がブームとなるまで浸透した要因としては、(1) 地方自治体レベルで展開されている同性間のパートナー関係への証明が始まったこと、(2) 「LGBT 市場」なる言葉から見られる資本主義からの関心/との結びつきの強化があげられる（志田 2016:2）。地方自治体レベルで展開される同性間のパートナー関係への証明は、2015年の渋谷区「同性パートナー条例」を初めとし、世田谷区、兵庫県、沖縄県、三重県の幾つかの都市で開始された。さらに2012年に電通ダイバーシティ・ラボが「日本の LGBT 人口は 5.2%」という（この数字自体の妥当性は専門家間で問題とされているが）調査結果を発表したことをきっかけに、「LGBT」が資本主義の消費ターゲットとして注目され、「LGBT 市場」が日本で確立した。2012年の経済誌を見ると「国内市場 5.7 兆円「LGBT 市場」を攻略せよ」（週刊ダイヤモンド 2012）や、「知られざる巨大市場・日本の LGBT」（週刊東洋経済 2012）などと LGBT 市場の大きさとその活用について書かれている。日本における「LGBT ブーム」については「LGBT 市場」といったマーケティングの影響が大きいということは注意しておきたい。

日本の LGBT ブームは「多様性」や「インクリュージョン」といった文脈で語られながら、実際にはマーケティングの対象として企業が起こしたムーブメントであることはしばしば当事者から批判を受けている。ここで、批判の事例をあげる。

① 渋谷区の同性パートナーシップ条例

2015年11月に公布された「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」いわゆる「同性パートナーシップ条例」は、日本で初めて同性パートナーに対して行政が証明書を発行する政策として多くのメディアで注目された。だが区はその水面下で宮下公園の「ナイキパーク化」を実施し、その整備に伴って公園を住処としていたホームレスを強制退去させている。これを覆い隠すように公布された「同性パートナーシップ条例」に関しては、日本の「ピンクウォッシュ⁽⁴⁾」として活用したのではないかとホームレス排除に抗った活動家たちからは批判が上がったのだ（田原 2016:第42段落）。

② エグゼクティブ・ゲイ

「エグゼクティブ・ゲイ」という言葉は大手広告代理店の博報堂が2016年に打ち出したものだ。月々の可処分所得（自由に使えるお金）が20万円以上で、交友関係が広く情報発信力の高いゲイを「エグゼクティブ・ゲイ」と名付け、彼らの消費スタイルを調査した。要するに、経済的に余裕のあるゲイにターゲットを絞ったマーケティング方法を研究したことだ。この企画の意図とは何であったのだろうか。立案に関わった専門家の宮井弘之はインタビューでこう語る。

「LGBTには以前から着目していました。LGBTはセクシャルマイノリティと言われますが、少数派ということは他の人が持っていない特別な価値観を持っているということだと思います。だからこそ調査して着目すべき点を探索する必要がある、そう考えました（多田 2016:第6段落, 下線は筆者による）

ここで彼の「少数派ということは他の人が持っていない特別な価値観を持っている」という発言に注目すると、「多数派」であるという前提から編み出された一種の「少数派」に対する偏見とも言えるだろう。こうした偏見に基づいたゲイをマーケティングの対象として「活用」していくことに批判が向けられた。

このように、日本におけるLGBTブームの中で行われてきた事象は「LGBTを活用する」という文脈の元で進められてきた。それは広告代理店が介したマーケティングがもたらした経済市場であり、その意味で当事者からは批判の声が上げられるのだ。

2-4. リサーチクエスチョン

では、「LGBT ブーム」と呼ばれる現象が巻き起こることで当事者の生きづらさは解消しつつあるのだろうか。以下は世界価値観調査⁽⁵⁾による同性愛に対する寛容性のポイントの推移を国ごとにデータ化したものである。

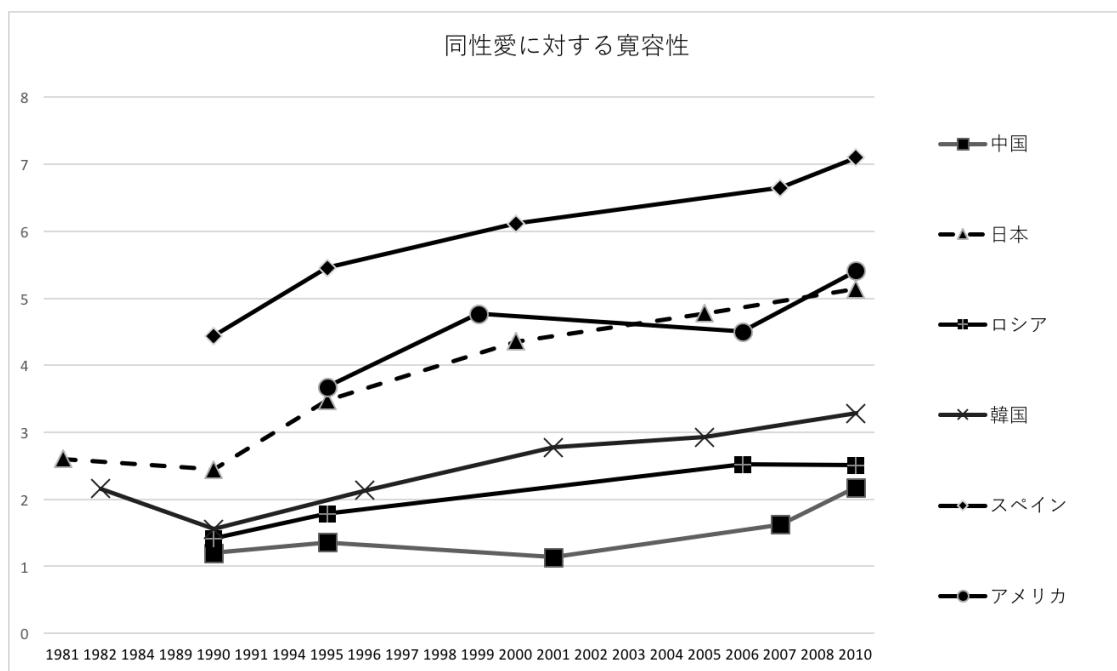


図3 同性愛に対する寛容性：(出典) 世界価値観調査 1981-2012 を元に作成

同性愛を認めるかどうかが 10 段階(1 (全く間違っている (認められない)) から 10 (全くたやすい (認められる)) の数値で評価)で訊ねられている。

この図を見ると、日本における同性愛に対する寛容性は他先進国に比べて見てもかなり高いポイントを獲得しており、年々その数字を伸ばしているということがわかる。ということは、日本は同性愛に対して「寛容な」国なのだろうか。ではここで別のデータを参照する。



Do you have a work colleague, close friend or relative who is gay, lesbian, bisexual or transgender?

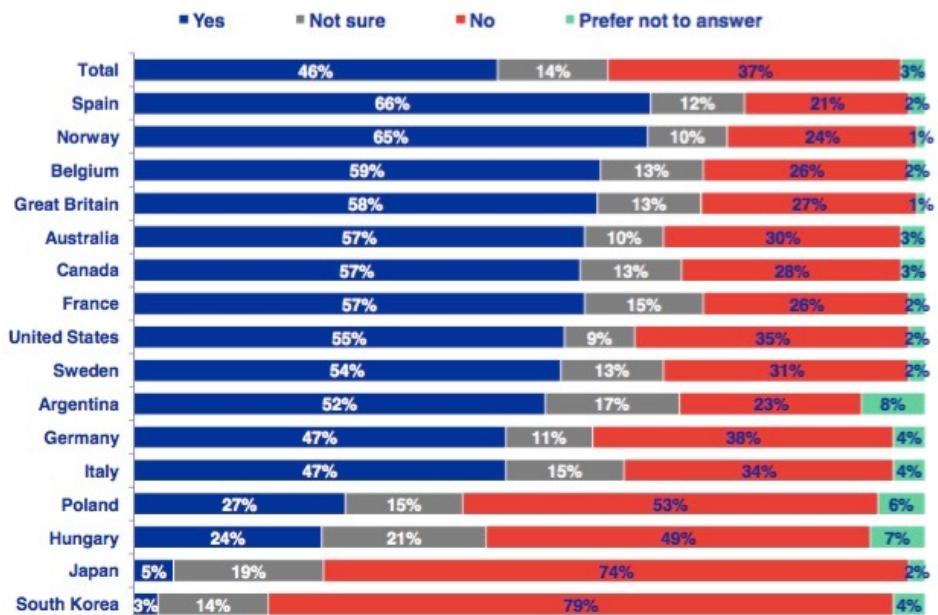


図4.同僚、親友、親戚に LGBT はいるか：(出典) Ipsos(2013:28)

図4は同僚、親友、親戚に LGBT はいるかという質問に対する答えを国ごとにまとめたものである(Ipsos 2013:28)。これを見ると日本で「はい」と答えた人の割合はわずか5%であり、他国に比べ圧倒的に少ないということがわかる。もちろんカミングアウトすれば良いという話ではない。カミングアウト至上主義はカミングアウトせずに生きようとする者の前に大きな権力として立ちはだかる。しかし、当事者が周りにほとんどいない（とされている）にもかかわらず、「セクシュアルマイノリティに寛容である」と推測することが果たしてできるのだろうか。「LGBT」の割合には各国で差があまりないといわれているのにもかかわらず、なぜ身近なところでの見え方に国ごとに差があるのだろうか。日本における「寛容性」とは一体何を意味するのだろうか。

また、これだけ LGBT ブームと呼ばれる現象が沸き起こる中、依然としてカミングアウトをできないのは何故なのだろうか。日本の同性愛に対する寛容性のポイントはアメリカとほぼ同じであるのに対し、知り合いに LGBT がいるかという質問に「はい」と答えた割合はおよそ十分の一である。そこで、日本独自に進展してきた LGBT ブームとは当事者にとってどのようなものだったのか、また、ブームの中で何が変化し、何が変わらないのかなどを当事者へのインタビューから考察していきたい。

第3章 インタビュー調査

3-1. 調査の概要

この章で提示されるインタビューデータは筆者が実際にそれぞれの方に話を聞き、電子レコーダーで録音したものを書き起こしたものである。記号は以下のように使用した。

I : 調査者（池上）

I以外のアルファベット : インタビュー調査対象者

[中略] : プライバシー保護のためなどによる省略

[] 内の説明 : 筆者による補足説明

“ ” : 本文中のデータ引用

アンダーライン : 筆者による強調

なお、被調査者（インタビュイー）を示すアルファベットは、それぞれ A から順にふつてある。調査はいずれも 2016 年 11 月から 12 月の間に行われた。一人あたりにかかった時間は 90 分から 120 分である。本論文への掲載許可あり。

3-2.A さんへのインタビュー

A さんは 20 代後半の会社員、レズビアンである。

【LGBT ブームについて】

A さんは昨今の LGBT ブームと呼ばれる現象について、身の回りでは何も変化がないと言った。

I : 今は LGBT ブームという現象が起こっていて、いろんなメディアで以前よりも話題にあがってきてますが、それは社会そのものがいい方向に変わったと思えますか？

A : 自分のコミュニティの中ではもうあんまり…気にしないって言ったらあれだけど。でもなんかテレビとか自分の親とか、広く見ると何も変わってないよ。

I : そうなんですか。

A : 変わってないよね。やっぱ他人のこと？だから。

2-4. で述べたように、テレビや新聞、インターネットなどのメディアでは LGBT というワードが多く見られるようになってきた。その多くは「LGBT」の多様性（ダイバーシティ）

や包括性（インクリュージョン）、人権問題の文脈で語られる。しかしその一方で同性愛（特に男性間）を揶揄して笑いをとるような風潮や根強い偏見が日常の些細な会話や表現に依然として見受けられる。Aさんの“広く見ると何も変わっていない”との発言は、そのような「LGBT ブーム」の空虚さを表しているだろう。また、Aさんは「LGBT 支援」という言葉にある違和感を語っている。

A：支援していこうみたいな。でも支援じゃないんだよな…という。

I：支援という言葉に違和感があるんですか？

A：もともと根本的な女性と男性の収入の格差とかそういうのがあるから。一人一人の考え方、捉え方でしかない。そこを括って「LGBT 支援」として提案ってどうなのかなって思って。不思議っていうかモヤモヤする。友達同士のカミングアウトだったらまた違うと思うんだけど、50歳の上司とかだったら「どうしようこれからどういう風にしてあげたらいいんだろう」ってなりそうで。

I：「してあげたら」っていう…。

A：やっぱり何か「困ってるんだろう」みたいな思い込みがあるから。

「LGBT ブーム」の中で目にすることが増えてきたのが「LGBT 支援」という言葉である。悩んでいる、困っている人がいるのなら助けてあげようというのが「支援」という言葉の根本にあるようだが、Aさんはそれを全て括って一言で「LGBT 支援」と言ってしまうことについて違和感を持っている。セクシュアルマイノリティであることが無条件に「困ってる人」「支援してあげなきゃいけない人」の対象になってしまうことを Aさんが“思い込み”と表現しているように、当事者と非当事者の認識のズレが生じていることを示しているのではないだろうか。

Aさんは企業が社員向けに「LGBT 研修」と題して「LGBT とは何か」「LGBT が組織の中で抱える悩みは何か」といったセミナーが行なわれていることに対しても嫌悪感を抱いている。

A：私だったら絶対行きたくないと思った。

I：なぜそう思うのですか？

A：だってそれってその場に〔当事者が〕いないと思ってやってるような感じがする。もしかしたら話の中で「あなたの隣にもいるかもしれません」とか言ったり、みんな「へえそうなんだ」って思うかもしれないけど、自分〔がまさに当事者〕じゃん。しかも入門中の入門をなんで私がやるんだろうって。私だ

ったら絶対嫌だと思った。

I: そういうセミナーはないほうがいい?

A: でもやらないよりはあった方が良いんだろうけど。

Aさんが「LGBT研修」に嫌悪感を抱くのは、そこで行なわれる研修は現実味がない語りとして想定されるからだ。どんなに講師が“あなたの隣にいるかもしれません”と言ったとしても、それがどこか別世界の人間のことを話しているようで、現にその場にセクシュアルマイノリティがいる可能性を全く想像していないと感じてしまうからだ。確かに実際の「LGBT研修」はそのような語りで行われないかもしれない。それでもAさんが感じる嫌悪感は「LGBTブーム」の流れが生み出したリアリティに乏しい想像力であり、寛容性の一つの実態である。「LGBT支援」「LGBT研修」といった非当事者が疑いなく善意で行っているその行為に、当事者とのギャップが生じていることは間違いないだろう。

【寛容性の話】

さらにAさんは友人にカミングアウトをした際の会話で感じた違和感について語った。

A: 割とまあ、よく感じたのは、[カミングアウトに対して]「全然いいと思うよ、大丈夫」とか、「友達にもそういう人いるし」、「あたしもうゲイの友達いるし、むしろいいことじゃん」とか言うんだけど。

I: そういう反応に違和感がある?

A: 言わなきゃよかったです。あ、そ～…って思って。「全然いいと思う」は上から目線だと思った。なんかそれすごい…あのー…一周回ってちゃんと考えたことあるのかなって、すごい尖ってた時は思った。なんか今は、理解してくれないことに対して怒つてると、理解しろって思うことは強要だからうまく共存して、まあ、どこまで歩み寄れるかが今後のテーマだと思うようになったけど…。多くの人は理解してくれないからさ、「差別されてる」っていうのにしがらみを感じてて。私もそういうの思ってた時期もあったし、そういう時はやっぱなんか上から目線だなみんなって。

I: ああなるほど。

“全然大丈夫”という言葉は一見寛容的態度を示す言葉のように思えるが、Aさんはそう捉えていない。むしろ“上から目線”的な態度を感じて嫌悪感を抱いている。さらに“ゲイの友達いるし”という理由でAさんをも捉えようとしていることからも友人の安直さが見

られ、この発言も A さんに嫌悪感をもたせているだろう。友人が自覚なしに持ってしまつた“上から目線”は、同性愛を最初から当然のごとく「異常なもの」として捉えていることを前提として、その上で自分は「異常」であっても特に気にしないから“大丈夫”だという表現になってしまっているところにある。ここで重要なのは A さんの友人は初めから自らの立ち位置（異性愛）を「通常」としていることだ。そして“全然大丈夫”ということでその後の議論を遮断してしまう。

そしてこの“上から目線”的な態度は、同時に“大丈夫”でなくなる境界線を生み出すことになる。

A：ヤフコメ【Yahoo コメントランキング】とかがすごく面白くて、だいたいそういう LGBT 関連の記事が出て、コメント見てると、色んな意見があるじゃん。

I：はいはい。

A：で、なんか、多くの人はわりかし同性で付き合ってるカップルは全然オーケー。だけど、結婚ってなるとちょっと話違うよねっていう人たち。

I：ああ～うん。

A：自分よりも下じゃん。

I：うん？

A：男女のカップルって結婚する権利を持つててるけど同性カップルはないから。じゃそこで勝手に趣味でやつてて感じで、「全然いいよ」っていってる。

I：同性カップルは趣味だというわけですか。

A：そう、だから「全然いいと思う」って。だけど同性カップルに同じ権利…いうか変な話もしも、同性カップルが、「同じ地位」、目線が同じになって、結婚もするようになる、で、結婚したら受けられる社会保証を受けられるようになる、子供を持つとうとするようになる、となったら、いよいよ自分たちの聖域を侵されるじゃない？

I：うんうんうん。

A：いよいよ自分たちのところに入り込んでくるとなつたら、ちょっと待ってそれはないよねって言い出すんだよね。それって本当の「全然いいと思う」なの？

I：あ～。自分たちに被害の及ばない範囲でなら、「全然いい」？

A：そうそうそう、関係ないから。

ここで“大丈夫”と“大丈夫”でないの境界線は“同性で付き合ってるカップル”と同性婚カップルの間に引かれる。異性愛者が“関係ない”場面では同性で付き合おうが気にしないが、

同性婚となると話が変わってくる。同性カップルが自分たちと同じ目線の高さに来て“自分たちの聖域を侵す”ことになると途端に反対するのだ。ここで“聖域を侵す”とは、「被害を被る」のような意味を持つが、実際に同性婚が彼らに物理的な被害を与えることはないと考えられる。つまり“聖域を侵す”とは、異性愛と同等に同性愛が扱われることで異性愛の定義が揺らぐ危険性を示唆しているのではないだろうか。世の中には異性愛しかない、異性と結婚することで一人前の大人になれるといった強い思い込みによって無意識に正当化していた行為が揺らいでしまうかもしれない。そして、“全然大丈夫”、“全然いいと思う”という言葉はそういった条件付きの受け入れなのだ。そしてその条件は、“全然大丈夫”と言った本人でさえ自覚せず、同性婚といった具体的な議論になって初めて浮き彫りになる、言わば後出し的なものである。それは、LGBTがダイバーシティやインクルージョン、人権問題として語られた際に、無条件で「差別してはいけない」「受け入れるべきもの」と安易に認識させられてきた弊害だともいえないだろうか。

“全然大丈夫”だと言い放った A さんの友人は A さんを見下したつもりはなかっただろう。むしろ A さんを「受け入れる」意思表示の発言だったかもしれない。しかしそこには根底にある「上から目線」の態度が含まれており、それを A さんは如実に感じ取ったのである。

A：きっと悪気はないんだけど、かえって純粋だから怖いんだよね

I：知識が足りないのでですかね、「わたしアライです」っていうのもそう？

A：「アライです」って言われたらもう〔目の前に壁を作る動作〕。

「アライ」とは、「同盟者」の意味の英語が語源で、LGBTを支援する非当事者を指す。A さんの“純粋だから怖い”というのは、そういった“大丈夫”でなくなる境界線を自覚なしに越境し、拒絶される恐れを危惧しているものだろう。A さんが「アライ」を信頼していないのは、そのように“全然大丈夫”と表面上だけで受け入れようとする者が名乗ることを危惧しているためだろう。

【レズビアンの不可視性】

Aさんはレズビアンには特有の不可視性があるという。

A：未だに、未だに言われるのは、未だに私に「男になりたいの？」って聞いてくる人いるの。

I：そうなんですか。

A：未だにですよ。

Aさんは女性として女性に恋愛感情を持つことが未だに理解されないと語る。そのどちらかが男性としての性自認を持っていると思い込むことで同性愛を異性愛の形に落としこみ、納得しようとする人が未だにいると言うのだ。レズビアンはメディアに出てくることはゲイに比べて少ない。その不可視性がAさんと友人のなにげない日常会話からも現れる。

A：「職場にゲイっぽい人がいて」っていうゲイ自慢してくる人。ゲイの友達がいることをステータスにしている人がいる。眼の前に本物がいるのに言ってるからすごく面白くて。〔中略〕よくゲイバーとかオネエ系の人に恋愛相談したいって女人ってたくさんいて、それに対するゲイのイメージってすごく強いのかもしれない。

I：レズビアンのイメージは…。

A：レズビアンはそんなにない。決めつけられて不快だと思ったことはそんなにない。

I：そもそも決めつけるイメージさえないとか？

A：ないと思う。だからすごく感じた、そういうゲイの友達がいるってことが「私寛容性あるの」っていう自分のステータスにしようとしているってこと。〔中略〕でもそういう話をしている中で誰1人と私のことを疑わないの。ここにいるけど誰1人と私がそうって想像もつかないんだろうなって思うとすごい面白かった。

I：想像しようとも思わないというか。

A：私も「ここです！」と言いたいわけでもないし、気づかないことに対して「けつ」とか思ってるわけではないけど。なんかやつぱりいるんだろうなっていうのはわかっていても、より現実的なケースまで想像しきれてない。

日常的な話題の中で“ゲイの友達がいる”とすることで自らのマイノリティに対する“寛容性”を示す者はいるそうだ。そこに想定されるゲイ像がメディアに出てくる“オネエ系の人”であったとしても、ゲイの存在が可視化されていることは推定できる。そういった“決めつけるイメージ”すらレズビアンにはないのだとAさんは言う。“ゲイの友達がいる”と“寛容性”を示す者も、レズビアンを引き合いに出すことはないのだ。だから“ゲイの友達がいる”と語りながら目の前にいるAさんのことをその場にいた誰もが当事者だとは想像もしない状況を見てAさんは“面白かった”と語っている。メディアの中に現れる“オネエ系の人”を

想像して語られる“寛容性”には“現実的”な“想像”が伴っていない。

さらに A さんはカミングアウトをした時の人々の反応からもレズビアンの不可視性が表れるのだと語る。

A: よく聞くのが、男の人にレズ⁽⁶⁾をカミングアウトしたら「俺が直してあげる」「男を知らないからだよ」っていう。男と付き合ったら変わるとか思ってる人が多い。〔中略〕女子校の子に相談したとしても、「今はそういう環境だからだよ」とか「憧れじゃない?」とか。新聞の人生コーナーの回答に、「それは憧れの気持ちで、好きって気持ちにはいろんな形があってたくさん恋愛をしていろんな経験をしていくと素敵な男性に出会えますよ」みたいな答えをしてて。絶対求めてた答えと違うんだろうなって。

レズビアンは「俺が直してあげる」「男を知らないからだよ」「素敵な男性に出会えますよ」のように当事者のおかれる環境に原因があると見なされてしまうとみなされてしまうのだ。これはレズビアンの存在がいかに社会に浸透していないかということを如実に表しているだろう。

【セクシュアリティとアイデンティティ】

最後に A さんはカミングアウトについてこう語っている。

A: 変な話、血液型を聞くのと同じくらいにフランクに話せるようになるといいんだよね。あえてすべての人がすべての人にオープンにする必要はないけど。

I: 今はカミングアウトが血液型を言うこと以上にいろんな意味を含んでしまうってことなんですかね。

A: リスクが大きいよね。テレビで笑われているゲイの人たちとかがいるからさ。

日本では血液型で人間の性格を分類することがあるが、何の型であるかによってその人の全てを語ることができないというのは自明のことであろう。A さんの語りから、カミングアウトは“テレビで笑われている”人たちのイメージを背負いこんでしまうことであり、セクシュアリティによって 1 人の人間のあらゆることを判断されてしまう危険性を含んでいる。“血液型をきくのと同じくらいにフランクに”というのは、セクシュアリティがあくまでもその人間の特徴の一部であり、それが全てではないということを主張しているのだろう。

3-3. Bさんへのインタビュー

Bさんは40代半ばであり、LGBTという言葉が日本に普及する前からセクシュアルマイノリティに関する運動（レインボーパレード、エイズHIV/AIDS予防啓発キャンペーンなど）に携わってきた。LGBTのカテゴリーでいうならばレズビアンであると述べている。

【カテゴリーに関して】

以下の会話は、2007年から始まった関西のレインボーパレードの当時の様子を聞いていたところから始まる。当時はまだ「LGBT」が言葉として流通する以前のことであるが、すでに様々なセクシュアルマイノリティの人々が集まってパレードをしていたことがわかる。

B：東京はずっとレズビアン＆ゲイパレードとしてスタートして、「他の名前が入ってないのはどうなんだ」ってなってレインボーになってて。〔中略〕

I：レズビアンとゲイじゃなくても参加できるようにですか？

B：LGBTなんて単語当時はなかったので、「レインボー」で。セクシュアルマイノリティのテーマカラーである6色のレインボーを掲げて、色んな人を巻き込むことを推してたので、最初からゲイとかレズビアンっていう言い方はしなかったです。

2007年当時、「LGBT」という単語は今のように誰もが知っているようなものではなかった(図1)。しかし、そのかわりに“レズビアン&ゲイパレード”ではそれまで巻き込むことができなかったセクシュアルマイノリティも含め、セクシャルマイノリティ全体を指す言葉として“レインボー”が使われた。そして、現在に至るまでセクシュアルマイノリティを主体とする活動には度々“レインボー”という単語は使われる。

I：LGBTって言葉が出る以前からセクシュアルマイノリティ全般で運動する動きはあったんですね。

B：なんかLGBTって言葉はわたしらの中で流行ってる言葉じゃなくて、外の皆さんのが言ってる言葉な気がする。

I：そうなんですか。

B：最近の「LGBT男性が自殺」って表現とか、いや、ゲイの男性だからって。LGBTのLという属性なのに、4つまとめられて「LGBTですよね」って言われると、「うーん…、の中のLね」っていう。だからLGBTって外の人が使ってる言葉だし、なんでこんなブームになっちゃったのかが私たちにもわからない。

〔中略〕

I：〔アメリカでの〕運動としては使い易い言葉だったようですね。

B：可視化するためのムーブメントとしては有効な単語だったんでしょうけど、あれだけ外野が違う温度差で私たちを追い抜かすかのように盛り上がっているのをみると違和感はある。自分たちのことを指している文字なのに自分たちのことをさしていないように感じる。LGBT っていう別の星の人たちなのかなあって。

「LGBT」という言葉は 80 年代アメリカで、当事者が自分たちを名乗る中立的な言葉として運動に使われてきた言葉であった。しかしそこにあった主体性は「ブーム」のなかで徐々に失われているのではないだろうか。40 代の B さんは“外の人が使ってる言葉”、“外野が盛り上がってる”と、非当事者が使う言葉としてここ数年の「LGBT」を捉えている。その結果、“自分たちのことを指している文字なのに自分たちのことをさしていない”を感じているのだ。それは、メディアで“LGBT 男性”といった本来の意味が曖昧になってしまうような使われ方が流通していることも影響しているだろう。さらに、B さん自身の年齢は 40 代であり、「LGBT」はここ数年で一気に普及した言葉であるため（図 1 参照）、「LGBT ブーム」の前からセクシュアルマイノリティとして活動していた人々にとってはその主体性に違和感があるのかもしれない。

B さんはそのような文脈の中で「LGBT」とひとくくりにはできないと言う。

B：LGB と T は分けないといけないと私は思っていて。性自認が違う段階で、「自分が何者か」っていうところに違和感のある皆さんと、そうでない皆さんなので。トランスジェンダーの皆さんからは、「一緒にしてくれるな」っていう声もありますし。

I：それは逆に LGB から T にも？

B：うん、あると思う。

B さんは性的指向に関する LGB と性自認に関する T は分けるべきだと主張する。同性愛、両性愛であることが直面する困難と、トランスジェンダーであることが直面する困難ではその内容に違いがあることは想像できる。さらにその両極で“一緒にされたくない”というような思いを抱えている人がいることが明らかになった。L/G/B/T をひとくくりにしてもそれぞれの関係性はかなり微妙なニュアンスを含むものである。B さんはレズビアンとゲイでも微妙な関係性であることを語った。

I：例えばゲイの人とレズビアンの人ってあまり接点がないんですか。

B：ないですね。恋愛対象にならないので何の利害関係もないから。友達にはなれるけど。同じ新宿二丁目っていうエリアが安心するっていう共通点はあるけど。

同性愛というカテゴリーであってもレズビアンとゲイでは接点がないのだとBさんは言う。街を見渡してもゲイバーとレズビアンバーは明確に分けられており、そのコミュニティは交わることがない。曜日によってゲイとレズビアンの区分けをしているバーも存在し、両者の接点がないという。レズビアンとゲイはそれぞれの文化がそれぞれで発展し、それぞれの居場所を確立してきたのだ。

さらにバイセクシュアルはレズビアンやゲイから差別されるという。

B：レズビアンでも、一回でも男の人と付き合ったことがあるとそれはバイだろっていう人いるんです。

I：区別したがる人がいるということですか？

B：たくさんいる。〔中略〕「男と付き合ったらビアンと言うな」っていう頑なな原理主義みたいな人がいるんです。

I：それはバイセクシュアルを下に見ているということですか？

B：バイの子は叩かれるんです。「結局裏切るんでしょ」って。どっちでもいいのに。

バイセクシュアルは“結局裏切る（異性愛者のふりをする）でしょ”とレズビアンやゲイから下に見られる。そして、同性愛者の中では「同性愛に忠実であること」が求められ、両性愛を「疑われる」者は排除されるという構図があるのだ。

「LGBT」といってもそれぞれのカテゴリーで複雑に絡み合った関係性があるということがこれまでの議論からわかった。それでも彼らは「ブーム」の中で「LGBT」という一つのカテゴリーで語られてきた。「LGBT ブーム」に大きな影響を与えたとされるマーケティングの文脈で語られる「LGBT 市場」(2-3)についてBさんは以下のように語る。

B：今 LGBT 市場って言われてるけど、全く見当違いだなって思ってて。〔中略〕ゲイの人って結婚しない人が多いから、お金に余裕がある人が多い。だからお金を使う余裕があるけど同じことを女性ができるかっていうとそうではない。そ

ういう男女格差を見ないままに LGBT マーケットって言っても理解できないって話。例えば、ゲイ雑誌って 1800 円とかして高いけどずっと続いてるんです。それは〔ゲイ男性が〕買う余裕があるから。でもレズビアン雑誌は続かない。それは一冊買ってみんなで回し読みするから。ゲイバーとレズビアンバーの料金設定も違う。

電通が LGBT 人口調査の結果を発表した 2012 年以降、「LGBT 市場」は経済界を中心に注目されてきた。そこで話題になっているのは「LGBT は高学歴が多く、平均年収が比較的高い」といった言説だ。これに則って「LGBT 向け」のマーケティングを試みるのが「LGBT マーケット」であるが、B さんは疑問を抱いている。その根底にある収入の男女格差へは目が向けられていないからだ。LGBT の中でも比較的高所得者が多いとされるゲイにターゲットを絞るのであれば、「LGBT マーケット」という言葉をわざわざ使う必要はない。それでも「ゲイマーケット」とは言わず、「LGBT」を引き合いに出すのは企業の評価を高めるためなのかもしれない。

【ブームについて】

ではブームがもたらしたことはなんだったのだろうか。

I : LGBT ブームって言われてますけど何か変わったことはありますか

B : 今年のパレードで出してる冊子には「私たちはブームじゃない、ずっとここにいる」って書いてあって、その通りって。私たちは浮き沈みしないし何も変わってない。むしろ周りの捉え方が変わったなっていうくらいで。

I : ジャアブーム=良かったっていうわけでは？

B : それで可視化が進んでイエーイとはなってない。ただ以前のブームと大きく違うのは世田谷とか渋谷区の自治体レベルとはいえ、制度として動いたこと。私たちは生きてる間にこういうことはないと思ってたので。同性婚に向けて大きく動こうとしているっていうところがすごいとは思っている。でもブームの一環として捉えたくはない。

I : 生きやすさにはつながらない？

B : ううん、あまり感じない。

B さんはブームが可視化を多少のもたらし、周りの捉え方が変わっても、“私たちは浮き沈みしないし何も変わってない”、“生きやすさにはつながらない”と言う。むしろ、”私た

ちはブームじゃない、ずっとここにいる“という言葉のように「変わらない」ということに重きを置いているようだ。ただ、ブームの中で渋谷区と世田谷区の同性パートナーシップ条例が施行され、自治体が動いたことは以前の「ゲイブーム」とは異なる動きのようだ。ただしこれは”ブームの一環として捉えたくない“とも述べている。

【条例の意味】

さらに渋谷区の同性パートナーシップ条例についてBさんはこうも語っている。

B：渋谷区（同性パートナーシップ条例）には違和感があって。その前にホームレス排除問題をどうにかしなよって。LGBTの問題だけやれば良いってことじゃなくともっと根本的に世の中にはいろんなマイノリティ〔高齢者、障害者、子どもなど〕がいる中にLGBTがいるって話があるってだけで。（中略）なぜLGBTだけを特化してやるのか。「うちLGBTフレンドリーなんで」とか言われても「あなたの会社バリアフリーなってないですよね」ってなるとすごくちぐはぐに感じる。

Bさんは同性パートナーシップ条例自体には“ブームの一環にはしたくない”と肯定的な感情を持っているが、渋谷区の状況を俯瞰すると違和感があるようだ。渋谷区は同性パートナーシップ条例を進めると同時に宮下公園の改修工事を行い、そこで野宿していたホームレスを強制退去させている。そういった自治体の光と影に目を向けると同性パートナーシップ条例には同性愛を認めようといった説得力を失ってしまうのだ。

B：だから同性婚をするにしても、私たちはみんなが当たり前にできることができないんですよ、だから一緒の条件にしてもらって良いですかっていうだけの話であって。マジョリティ基準で作られたものと同じ基準にしてくださいってだけなのに「優遇」とか「特権」とか言われる。LGBTの人権とかを叫ぶと、特別扱いして欲しいのかと言われる。そうじゃなくて今までなかったことにされて困ってるってだけの話で。

様々な社会のマイノリティに目を伏せて「LGBT」だけにターゲットを絞って政策を打ち出しても、かえって“特権”や“特別扱い”的ように捉われて非難の対象となってしまう。それは当事者の意図しない事態であり、「LGBTブーム」がもたらした負の側面なのであろう。同性婚は異性愛者に認められた“特権”であるという前提に立つことが必要なのかもしれない

い。

【レズビアンの不可視性】

さらに、Bさんはレズビアンには“閉鎖的”な雰囲気があるのだと言う。

B：私はレズビアンの閉鎖的な感じが嫌だからゲイの友達が多いのかも。

I：閉鎖的なんですか？

B：女子の独特的な雰囲気あるでしょ、ネチネチした感じとか。〔中略〕だし、今はSNSがあるからわざわざ出会い系を求めて高いチャージ料を払って二丁目に行く必要もないっていうのもある。お金ないのにわざわざバーに行く人はいなくなってる。ただでさえ賃金も少ないので。常連さんもいるけど正社員でちゃんとお金ある人なんだよね。

I：じゃあレズビアンバーはなくなっていく？

B：かもしれないね。若い人はあんまりもう行ってないと思う。年齢ごとの住み分けもあんまりない…。

I：それが閉鎖的っていうのにつながる？

B：うん…SNSのつながりは広いけど実際に会っているわけではないし。「OUT IN JAPAN⁽⁷⁾」もレズビアンの数はものすごい少ないんよね。やっぱりまだ社会的なカミングアウトの壁もまだまだきついのかな。

レズビアンバーにある独特の空気、さらに比較的経済的な余裕がある人しか通うことができないということからレズビアンは閉鎖的な雰囲気をまとっているのだと言う。その閉鎖的な雰囲気がカミングアウトの壁をより高めているのかもしれない。さらにレズビアンの不可視性には女同士の親密性が消費されている現状が影響しているのだと Bさんは言う。

B：これはストレート寄りの発想だけど、女の子同士の恋愛はポルノとか綺麗なもの、ファンタジーとして消費してる現実がある。憧れとか。綺麗なファンタジーの今まで止めたいみたい。

I：ありますね。

B：綺麗なもので止めたいっていうストレート〔の人〕の欲求、女同士の生きしゃいセックスとかは想像したくないとか。そういう回収のされ方もあるし、そういう情報しかなかったら、「そうか私ただの憧れなんだな」って思うしかないと思

うし。だから昔は「結婚しなきゃ」って思ってた人も多かった。

若い女性アイドル同士の恋愛をほのめかす演出は人気アイドルグループを筆頭に多く見られる。それらが“ストレート”（異性愛者）男性によって消費されている現状がある。しかしそれは“憧れ”や“綺麗なファンタジー”なのであって、彼女らがレズビアンであるかどうかは問題ではないのだと B さんは語る。そしてこのように女性の親密性が日常化してしまうと、当事者がレズビアンを自覚しにくくなるのだと言う。なぜお茶の間のテレビには「普通のレズビアン」が登場しないのだろうか。

B:でも結局ゲイの方でも、オネエっていうキャラクターでしか消化されないし、ゲイイコールオネエっていうイメージが定着してしまっているのでそれにすごく抵抗を示すゲイの方もいます。けどそうやって自虐的にキャラクターを昇華させないと、テレビ局って数字取れてなんぼなので、面白くないといけない、「普通じゃ困る」っていう世界なんですよね。LGBT=「異端な人」なので、普通の人じやダメなんです。

メディアの中でも大衆性の高いテレビはその人々の価値観をも揺るがすほどの力を持っているが、そこには必ず製作者の主觀が加えられる商業的なものである。“数字”が取れなければそれは番組として成立しない。“オネエタレント”がここまで流行し、テレビに毎日のように出ているのは製作者の期待通りに彼らが笑いを取り、視聴率を高められるからである。そこで“普通の人”をテレビに登場させるのは困難であり、そのためには“普通の”LGBT は出てこない。

B:例えば『東京グラフィティ』も巻頭特集で LGBT を紹介したりはするけど、そうじやない号でカップルの写真とるコーナーとかで同性カップルは一切出でこない。〔中略〕だから巻頭特集とかじやなくて普段の中で散りばめればいいんですよ。隣の人がゲイカップルとか、車椅子の人とか。いろんな人がいるって。いくら多様性を言ったって、説得力ないよねっていう。そうやって織り交ぜていかないと、「LGBT だけ特権だ」とか言われてしまう。〔中略〕メディアって「ゲイ疑惑」とか普通に言いますよね。悪いことみたいに。まだまだそんな状況なんですよ。

『東京グラフィティ』は、毎号東京にいる若者やカップルのスナップ写真を掲載している。

Bさんは第1章で述べたようなLGBTの特集以外の号で、同性カップルのスナップ写真が全く登場していないことに言及している。そういった“普段の中”にセクシュアルマイノリティの姿を掲載されることが、彼らの存在を特別感なしに語れるというのだ。さらに、“車椅子の人”などの障害者を含む社会に存在する様々なマイノリティを同時に可視化させなければ、“LGBTだけ特権”といった誤解を生むことになってしまうという。「LGBT」を特集する記事はその存在と知識を知らしめることにおいては良かったかもしれない。だが“普段の中”に、それも様々なマイノリティを登場させなければそれは“特別な存在”として認識されるだけなのだ。

【寛容性の話】

Aさんはカミングアウトした際に友人が言った“全然大丈夫”という言葉に嫌悪感を抱いていたが、Bさんもまた同じことを語っている。

B：私が信じてないのはカミングアウトした時に「あたしゲイの友達たくさんいるから大丈夫」っていう人で。それがイコール差別しないことに繋がらないから。そういう子に限ってゲイの友達がたくさんいることを自慢するから。大丈夫って言われても何が大丈夫なの？って。

I：そうですね。

B：結局大事だと思ったのは「リアリティ」と「イマジネーション」。自分のことじゃなくてもリアリティをもって感じられるか。思いを馳せられるのか、イマジネーションをどこまで広げられるのかっていうところが大事だなって。

ここでもまた“大丈夫”という言葉は“上から目線”的許容であることをBさんに感じさせる。それは“リアリティ”をもって“イマジネーション”できていないからだ。“ゲイの友達たくさんいるから大丈夫”という言葉は、こうした“リアリティ”を想像する可能性を遮断するものである。そして、一度遮断してしまった者とのコミュニケーションを図ることは困難を伴う。

B：けどそこで私もダメだって言えればいいんだけど、あまりにも息を止めることに慣れすぎて「ちょっと待って、その言い方なんなの」って、場の雰囲気とか考えて言えないし。〔中略〕分かってくれるかもしれないのにこちらも思考停止してしまっているっていうのも良くないとは思うけど。

I：でも負担がかかりますよね。

B：そう、なんでこんな当事者だけ苦労しなきゃいけないんだっていう。

“大丈夫”と言って安心しきっている人間に対して“ちょっと待って”と言うことは“場の雰囲気”を変えてしまうかもしれない。友人は悪意を持って“大丈夫”と発言しているわけではないからだ。そんな人間に対して“ちょっと待って”と言うことは地道な作業であるし、当事者一個人がその負担を全て背負うことはできないだろう。

【セクシュアリティとアイデンティティ】

Bさんはセクシュアリティが1人の人間を説明できるものではないと言う。

B：名付けるってことがいかにくだらないか、そこに縛られることへの警鐘。カテゴライズされることの危険性。〔中略〕カテゴライズって安心感も生むんだよね、私と同じ人がこんなにいるって。だけどそこに縛られる事もあるって。

I：例えばそのカテゴリーにいたいって人もいて、アイデンティティにしたいつて人もいて、一概になくせばいいってことでもないのですか。

B：それで安心する人はいればいいし。私も何のカテゴリーですか？って聞かれたらレズビアンって答えるけど、レズビアンって女として女が好きって言いますよね、性自認の話とかでてくるじゃないですか。だけど私はジェンダーの時点で違和感があるって。〔中略〕でもX⁽⁸⁾っていう意味でもなくて、「男ですか女ですか」いや、私ですかっていう感覚が強くて。〔中略〕だから皆さんのいう4文字の中だったらLですよって言ってるだけで、ジェンダーとしての女とかには抵抗がある。

ここでセクシュアリティのカテゴライズは“安心感も生む”が、同時に“縛られる”危険性があることが語られる。さらに、Bさんは「レズビアン」を名乗ることで自らの性自認までもが決めつけられてしまうことにも警鐘を鳴らしている。「レズビアン」を名乗ることは、ジェンダー規範に則った「女」を受容することであり、Bさんはそこに違和感を感じているからだ。これはセクシュアリティを言語化すること自体の不可性を表しているだろう。“男ですか女ですか”いや、私ですか”という言葉には、Aさんも述べていたようにセクシュアリティがあくまで一個人の要素の一つにすぎないという主張を物語っているだろう。

3-4.C さんへのインタビュー

C さんは 20 代前半学生の FtM⁽⁹⁾であり、学校のセクシュアルマイノリティが集うサークルに所属している。

【LGBTについて】

LGBT が連帯となって活動することとは一体どういうことなのだろうか。C さんは以下のように語る。

I: 大きく LGBT っていうカテゴリーがあるじゃないですか。

C: はい。

I: その LGBT 連帯みたいなかんじで活動するのはやっぱ難しいとか思うことありますか？

C: なんか、たぶんその全体がっていうのは個々人で社会に対する興味のレベルとかあるし、お互いにはうちよそはよそで全然他の L、G、B、T それぞれ別の蚊帳のこと何にもわかつてない人もそれなりにいると思うんで。活動家とかだったらお互いにある溝を隠しつつ、うまいこと連帯するっていうのはできると思いますけど、

I: うん。

C: 当事者たち全員がっていうのは無理なんじゃないかなって。

C さんもやはり当事者が一体となって LGBT 連帯で活動するのは難しいという。だがそれは L/G/B/T がそれぞれ違うコミュニティだからというだけでなく、個人のレベルに焦点を当てている。活動家は“お互いにある溝を隠しつつ”連帯することができるが、それが全員には置き換えられない。つまり、どれだけ興味を持つかのレベルは個々人によって違うのだから、その度合いによって連帯できるか否かは異なるということである。

I: 言葉 [LGBT] が出てくる前までは、

C: ゲイとレズビアンでそれぞれ、トランスジェンダーはトランスジェンダーでそれぞれやっててみたいな。

I: 向いてる方向は違ったけど言葉 [LGBT] ができたことで連帯っていうか、一緒に考えられるようになりましたよね。

C: 個々で言えば、レズビアンだと見えないじゃないですか。でもくつついたら見えるじゃないですか。トランジェンダーの人も別の方向向いてるっちゃ向い

てます。でもマイノリティの中でさらに細分化しちゃってる状態で活動しても微々たるものだし。人の目に触れる機会も少ないので、くつついちゃった方がやっぱりそういう意味じゃ力とかも強くなるし。〔中略〕ある時は合体して、ある時は個々で動くみたいなことをした方が良いんだろうなっていうのはすごく思います。

I：サークルもそうですよね、LGBT っていうので集まったからいい活動ができる。集まる時は集まって。

C：個々でやりたい時は勝手にやってくださいみたいな。結局セクシュアリティとか、そういう性に関することで性的少数者として今まで何かしらのストレスがあったみたいな意味では、細いつながりかもしれないけど一応みんなつながっているので、

I：うん、そこで連帯ができるっていうのは

C：悪いことではないと思いますね。

ここでCさんは「LGBT」というひとつの連帯がもたらしたことについて触れている。“見えない”存在だったレズビアンが、「LGBT」というふうに表記されることで“見える”ようになる。また、トランスジェンダー内で細分化していたコミュニティが同じ方向を向くことができる。それによる弊害もあるが、“くつついちゃった方が”、“力とかも強くなる”と、連帯することの可能性を見出している。そしてそれはCさんのサークルのように”ある時は合体して、ある時は個々で動く“ような緩い連帯であることが望ましいというのだ。

以下は、学校でサークルの勧誘をする際に「LGBT」という単語を使うかどうかを尋ねたものである。

I：たとえばサークルを広める時に、LGBTって言葉は使いますか？

C：LGBT サークルともとりあえず言いはしますね、言っても当事者向けに言つてるから LGBT って言ったら他の人たちも自分達が入ってるって思つて一応集まってはくるし、文字で打つときは短くて使いやすいから。

I：ああ、使いやすい。

C：前の代表はXジェンダーだったんで、まあトランスジェンダーなんんですけど一応溢れてるって意識もあるのか“s”つけたりって気を使ってましたね。

I：へえ、LGBTs？

C：LGBT's（ズ）なのかな、気にしてやってましたね。

この会話から「LGBT」の言葉の利便性が見て取れる。「LGBT」からこぼれ落ちる X ジェンダーなどは「LGBTs」と表記する。「LGBT」の 4 文字だけでは全てを総称できないことは承知の上で彼らは「LGBT」サークルを名乗る。それだけ短く簡潔にサークルを表象することができるし、「LGBT」サークルと言った時点で L/G/B/T 以外のものを排除しているなど受け手である当事者は思わないという暗黙の了解があるようだ。

C：そう、色々〔イニシャルを〕つけていったら円周率みたいになっちゃって、前ネットでみたセクシャリティのとかもんのすごい長くてなんじゃこれみたいなのあります。

I：そこまでいくと意味あるのかな？

C：もう覚えられないし区別もつかない。

I：SOGI⁽¹⁰⁾みたいな国連のやつもありますよね。

C：あれもあれで悪くはないと思いますけど今の段階で区別しないとまた埋まるだけな気もしますよね。使い所を分けてなら…。

さらに Cさんは LGBTIQA…のように文字を羅列することの無意味性を示唆する。カテゴリーを細分化し、増やしてもその分表象できないセクシュアリティが浮き彫りとなり、本来の意味がなくなっていく。その一方で「誰」よりも「何」に焦点を当てた SOGI については“今の段階で区別しないとまた埋まるだけな気”がすると、あまり肯定的な様子は見受けられなかった。カテゴリーを丹念に細分化することは意味をなさないが、かといって全ての性的指向、性自認に関するカテゴリーを包括してしまう SOGI では異性愛も含むこととなりアイデンティティには成り得ない。SOGI の考え方自体は“悪くはない”が、それが彼らを可視化できる可能性はあまり期待できないだろう。

【ブームについて】

「LGBT ブーム」の中で企業が打ち出す「LGBT フレンドリー」の流れについてどんな印象を持っているかを聞いてみた。

C：個人的にはそんなに信用してないですけど…ブームに乗ってるだけだろうし、結局企業にとっても自分の利益になるからやっているのであって、っていう風に思っていますし。

I：うん。

C：実際入ってみないと結局本当にやってるかなんてわかんないし。

I：あー。

C：ずっとそれをやり続ける保証も…ないし、余計ブームって言われてるところだし。だからあんまりそこらへんを気にかけてないですね。

I：あー。

C：なんか外野がブームで盛り上がりってるなっていう（笑）。

Cさんもまた、「LGBT ブーム」の中で企業が「LGBT フレンドリー」な態度を示すことには違和感を感じていることがわかる。それは企業が“自分の利益になるから”という理由で取り組んでいるだろうと想定されるからであり、ブームによる一過性のものだと感じられるからだ。実際に「LGBT フレンドリー」をうたう企業がどれほど当事者にとって意味をなすものなのか、そして継続的に取り組む姿勢があるのかは、入社してみると分からぬのだという。

I：ブームは信用できないって話ありましたけど、逆に良いんじゃないかなって感じたこととかはありますか？

C：でも別にパートナーシップを悪いとは思わないんですよ、その企業のブームでなんかやってるっていうのも信用はしないけど悪いとは思わないんですよ。ただやるんだったらもっと明確に、明示して何をやってるのかをはっきりしてほしい。〔中略〕最近風の噂で手術の保険適用かなんかの話が前より進んでるとかなんとかいう話を聞いてそれは個人的には嬉しいことではあるけど、それがブームと関係あるのかっていうと、別で今まで動いてきたじゃないですか、性同一性障害は。それはブームとは違うところで動いてるのかなっていうのはあります。

“信用はしない”が、“悪いとは思わない”というのがCさんの「LGBT ブーム」に対する印象であるようだ。やはり例えブームの一環であったとしても、企業や行政が LGBTについて考え、取り組もうとしていること自体は肯定できることなのだろう。ただし、Bさんも述べていたように、“ブーム”的一過性に巻き込まれてほしくない取り組みがあることも事実だ。

【寛容性の話】

「寛容」という言葉は自動的に多数派が少数派を「受け入れる」という立場を成立させてしまう。ならば、「受け入れる」のではなく、「多様な者が存在する」ということの認識を強調するべきなのだろうか。

I：多様性っていう切り口でセクシュアルマイノリティをとらえればいいんですかね。

C：受け入れる…っていうのも難しいし、色んなカテゴリーのマジョリティじゃない人たちに対応していくっていうのも難しいと思うけど、そういう人たちがいるっていうことを社会全体が関心を持って最低限の知識を共有するっていうここまでいかないとなって思いますね。

I：そういう人たちがいるんだっていうことをまず。

C：まだおとぎ話の世界だと、会うまで妖精みたいなものだと思ってた人もいたり、「ええ、いるんだ～」みたいな人もいますから。

I：ファンタジーみたいですね。

C：もっと現実味をもって知つてもらえればって思いますけど

Cさんは“色んなカテゴリーのマジョリティじゃない人たち”をそれぞれ“受け入れる”のは難しいと語る。そこで、“受け入れる”のではなく、“そういう人たちがいるっていうこと”の“最低限の知識を共有する”ことが重要となる。そしてそれは“おとぎ話の世界”的にどこか遠くの誰かではなく、“現実味をもって”想像できるものでなくてはならない。ここでもAさん、Bさんが述べたリアリティの重要さが強調される。

【アライについて】

Cさんの所属するサークルには「アライ」(3-2)を名乗る非当事者も在籍しているのだといふ。以下はそのことについて質問した会話である。

I：サークルでは「アライ」を名乗る非当事者も共に活動しているんですか？

C：そうですね、なんか、非当事者が入ってるのって珍しいのか何なのか、当事者団体の中でもあんまり多い方じゃないらしいんですけど。

I：ああ、そうなんですか。

C：こういう学校サークルみたいのだと。

I：それはアライの人が「自分はアライです」みたいな感じで？

C：そうですね。

I：興味をもって入ってくる？

C：こっちからは、やっぱり分からぬんで〔興味があるかないかは〕。

I：うん。

C：まあそれはもう興味を持ってくれてるんだったら、まあ…。

I：ふうん。

C：最初の時点でよっぽど興味がないうちのサークルを見つけてこないんで。公になってないから。そういう意味でんまり心配はしてないですけど、そういう悪質なものは…。

I：アライの人たちは、どういう意図で入ってきてる？

C：んー。

I：いろいろ知りたいとかそういう感じ？

C：そうですね、最初のこの人〔サークルを創設したうちの1人である非当事者を指して〕もそうだったんですけど、「勉強」って意味で。

I：勉強？

C：たぶんそれで入ってきてるって人もいるし、あとはアライなのか当事者なのか自分でわかつてない人とかもいるんで。

I：あー。

C：そういう状態でなんかとりあえず疑問があつたから当事者のいる人たちのところに行ったらどういう感じなのかわかるかなみたいな意味で来ている人もいるとは思いますね。

ここで、当事者の団体として創設されたサークルに非当事者が介入することを可能にした区分として「アライ」が存在していることがわかる。非当事者との区分けをし、当事者のみのコミュニティを作ることを目的とした場所に非当事者が「勉強」などの興味本位で介入することは、本来の意に反するので難しいだろう。だが、「アライ」を名乗ることで非当事者がその中に入ることが可能になった。「アライ」は当事者と非当事者を同じコミュニティに内在させることができるカテゴリーなのかもしれない。

とは言つても、「アライ」とは誰でも自称することができる言葉である。そのため Aさんが危惧したように“分かった気でいる”だけの者を生み出す名称にも成り得る。サークル内で「アライ」を名乗る者と当事者の間に亀裂が生じることはないのだろうか。

I：そこで例えばアライの人と当事者の間で、なんかちょっと気まずいなとか、

C：それは…

I：なんか噛み合わないなって感じたりすることはない？

C：んー…そこでっていうのはあんまりないですね。初めて来た人はみんなちょっと緊張してるかんじはありますけど。特にたぶん当事者、非当事者でって感じはあんまり…。

I：その区別はあんまりない？

C：はい、まあ非当事者の人がどういう雰囲気かにもよると思いますけど、うちの団体にいる非当事者はけっこうオープンに物言うタイプの人なんで、そういう感じではないですね。

Cさんの話を聞くと、サークル内に「アライ」を名乗る非当事者が内在していることに抵抗感のようなものはあまり感じられない。むしろ“興味を持ってくれるのだったら”と肯定的な印象を抱いているようだ。Cさんのサークルは学校の公認サークルではないので、コンタクトを取るには自ら検索をかける必要がある。その環境が安易に“分かった気でいる”「アライ」を排除するシステムを作り出しているのかもしれない。

【トランスジェンダーについて】

Bさんは「LGB と T は分けるべきだ」と発言していたが Cさんは以下のように語る。

I：同性愛とトランスジェンダーの間には差があると感じますか？

C：全然違いますね。

I：つまり？

C：まあ全然違うって言っても、FtM はなんかいっぱい種類がいるっていうかレズビアンに片足突っ込んでるっていうのもいるだろうし、そもそも LGBT のコミュニティに参加したことがないようなタイプもいるだろうし。

I：うん。

C：もともといたけど今は移行⁽¹¹⁾してるし埋没みたいな感じでコミュニティには参加しなくなった人とかがいるとは思いますけど。

I：うん。

C：でもたぶん、そういう意味だとコミュニティに関わってない人だったら自分達 FtM のこと以外は、他の LGB の人たちのことについての知識なんてほとんどゼロみたいな人がそれなりにいると思うし、シスジェンダー⁽¹²⁾と同じくらいの、傷つくようなこととか言っちゃったりする人とかがそれなりにいたり、ヘテロ

セクシュアルの人が当事者に言って無神経だなと思われるようなレベルのこと
を言うような人もいると思いますね。

“レズビアンに片足突っ込んでる”とは、SNS などで出会いを探すときだけ FtM がレズビアンの掲示板に書き込みをするような行為を指す。その場合、トランスジェンダーと同性愛の境界線は曖昧なものになり、区別がはっきりと分かれていないように思える。だがトランスジェンダーでも“そもそも LGBT のコミュニティに参加したことがないようなタイプ”は“他の LGB の人たちのことについての知識なんてほとんどゼロ”であり、非当事者がするような態度をとってしまうと言う。これは B さんが述べていた、LGBT はそれぞれのコミュニティがあり、それが交わることはないといった発言に類似している。C さんは LGB と T の関係性について述べたが、それは L/G/B/T のそれぞれに当てはまる事なのかもしれない。

前述の FtM でも「レズビアンに片足突っ込んでる」者はレズビアンからも FtM からも非難の対象となるそうだ。バイセクシュアルがレズビアンやゲイから差別されるといった「マイノリティの中のマイノリティ」といった言説があるが、そのような一見曖昧なセクシュアリティには当事者間で嫌悪感があるものなのだろうか。

I: そういうあいまいな人たちっていうか、どっちとも言えない人たちってやっぱりいると…迷惑っていうか嫌ですか？

C: 勝手にやってる分には勝手にやってくださいって感じはあるけど…この人たちはどういう考え方でこういうふうにしてるんだろうとは思いますね。特に被害を被ってるわけではないので…まあ、勝手にやってくださいというか、個人の考えることは個人の考えることなので…。

C さんは“あいまいな人たち”について差別的な感情を抱いているわけではない。しかし“この人たちはどういう考え方でこういうふうにしてるんだろう”といった違和感はあるようだ。“特に被害を被ってるわけではないので…”の発言から、何か実質的な“被害”が顕在化すれば“あいまいな人たち”に対して“勝手にやってください”とはいかなくなる可能性がある。ここで念頭に置いておくべきことは、差別感情があるか否かの議論はそれ自体に意味をなさないということだ。

「なんちゃって」とは、FtM の中でも「一生懸命トランスしている人」との差異化を図るためのカテゴリーである。そしてそれは、「FtM の下位カテゴリーであり、FtM コミュニティのなかで、時には暗に、時にはあからさまになされる非難の対象」(鶴田 2009:179) と

なる。「なんちゃって」についてはどのような印象を抱いているかを尋ねた。

C：最近の FtM でカウンセリング行って治療始めようと思う人だったら、最初に必ず自分がなんちゃってじゃないかを気にすると思います。

I：そうなんですか。

C：そこらじゅうで「そういうもの」が出てるし、なんかその全部移行した人の SNS とかに、移行してなくて自称 FtM がリツイートされながら叩かれるみたいな、そういうのあったりするんですよ。

I：そっか。

C：ブログとかで、こいつらは違うみたいなこととか言ってる人もいて。〔中略〕そういうものもやっぱ目に入ってくるんで、自分がそのなんちゃってなんじゃないかっていうのは、情報を探してるようなタイプの人だったら一回ぐらいは気にしてるんじゃないですかね。

C さんによれば、トランスジェンダーについて情報を集めようとするとインターネット上には「なんちゃって」や「自称 FtM」を批判する言説が多く出てくるそうだ。“こいつらは違う”と差別されている「なんちゃって」を客観的に見ることで、自分を「なんちゃって」なのではないかと疑い、カウンセリングに行くのだという。

I：だからこそ、医師からの診断とかが欲しい？

C：っていうのはあると思う。

I：その診断がないと、自分は何なんだろうってなってしまうんですかね。

C：なんか安心しやすいっていうのはあると思う、診断があれば。診断がないと結局自分が言ってるだけっていうのは変わらないでの。

トランスジェンダーの中で批判の対象となる「なんちゃって」を見て、“医師からの診断”を手に入れることで自分は「なんちゃって」ではないのだと主張し、差異化する。そのような構造があるのではなかろうか。C さんの“診断がないと結局自分が言ってるだけっていうのは変わらない”の発言は医師の診断を受けることなく、病理としてトランスジェンダーを扱わない者の立場を揺るがすものになるだろう。

C：やっぱり FtM のツイッターとか見ててもそういうつながりが欲しい人だったら、どこまでやってるかを日付と一緒に載せてたりするんですよ。

I: 例えば?

C: なんか、「ノンホル」「ノンオペ」みたいのとか、「何月何日からホルモン」とか書いてあったりして。

I: うん。

C: 自分はまだ何もやってないけど…みたいな人とか、自分はやってるんだってアピールしながらやってる人とか。

I: そういうあいまいな人たちを叩くのってどういう人たちなんですか？

C: たぶん堂々と叩いてる人たちっていうのは、性別変更するここまでいってりる人とか、まあ少なくともホルモンは絶対やって、社会的にある程度男性として生活してる人がたぶん叩いてると。

I: じゃあやっぱそういう人たちにとって曖昧な人々は自分達の存在を揺るがすものだから、一緒にされたくないみたいなのがある？

C: そういう感じ…年齢とか時代もあるかもしれないけどそれなりに全部やるのにはお金とかかけてきてるし、そのために早めに働き始める人もいるだろうし、一生懸命やってる人たちからはそういう中途半端な人たちっていうのはちょっとこう…否定したくはなるのかなって思います。

Cさんによれば、ホルモンを打ったか、手術はしたのか、いつしたのか、これからする予定があるのか、それらをSNSの自己紹介欄に表記することで自らを「なんちゃって」ではない“一生懸命やってる”FtMだと正当化する。“一生懸命やってる人たち”にとって“中途半端な人たち”は自己のアイデンティティを揺るがすものなのだろうか。

“一生懸命やってる人たち”はFtMを病理化し、「多数派」に近づくよう「治療」する。いわば、マイノリティから脱出することを目指す。彼らの「病理」を「完治」したと判断するのは「多数派」の医者である。ならば彼らが承認を求めるのは「多数派」の医者であり、“中途半端な人たち”ではない。それにもかかわらず“中途半端な人たち”を批判するのは多数派でも医者でもなく“一生懸命やってる人たち”なのだ。“中途半端な人たち”への批判は、「多数派」になるために「完治」したいからではなく、自分のアイデンティティを確保するためなのである。

【セクシュアリティとアイデンティティ】

これまでのAさん、Bさんと同様にCさんもセクシュアリティはアイデンティティではないという。

I: 例えば Cさんはトランスジェンダーですってことを主張して生きていきたいわけでは…

C: ないですよね。活動家ぐらいじゃないんですかね。たぶんそこをアイデンティティにすると疲れるじゃないですか。だからそこは一部として。

I: うん。

C: 全体で自分でいう感じ…ですね。

I: うん。

C: だから相手方に「君はトランスジェンダーなんだね、さあ来い！」みたいに構えられても困りますよね。

I: さあ来い？

C: たまにいるんですよね、言ったらそこしか見えなくなっちゃうみたいな。ちゃんと予備知識を持ってるくらいで、ああそうなんだって一部くらいで見てくられる方が接しやすい。

Cさんはトランスジェンダーであることにアイデンティティの全てを持っているのではない。それは“疲れる”という言葉の通り、負担を伴うものになり得る。さらに Cさんは“活動家”と自らを区別していることにも注意したい。トランスジェンダーというフィルターを通して自分自身が見られることに対して Cさんは“困りますよね”とその困難を語る。あくまで“そこは一部”であって、それ以外の様々な要素を含めて“全体で自分”というのが Aさん、Bさんとも共通して見られた主張であろう。

3-5. Dさんへのインタビュー

Dさんは、性同一性障害の当事者と家族を支援する NPO 法人で相談業務を担当するほか、キャリアコンサルタントとして LGBT の理解と支援を進める講演、研修、当事者学生を対象とした就職支援のカウンセリングなどを行っている。

【LGBTについて】

以下はどのようにして Dさんが支援の幅を性同一性障害からセクシュアルマイノリティ全般に広げたのかを示す会話である。

I: (支援を始めたのは) いつ頃ですか？年代でいうと。

D：6年くらい前かな。

I：2010年とか？

D：そうですね、そのくらいかな。

I：その時って、LGBTって言葉はまだ…。

D：全然です。うん。

I：2013年くらいからですか？

D：そうですね。

I：その時はセクシュアルマイノリティっていう枠組みというよりは、同性愛と、トランスジェンダーって分かれていたんですか？

D：そうですね、私としては同性愛っていうのは全く認識なくて。性同一性障害だけでしたね、認識としてあったのは。目の前にいる大切な人が性同一性障害で、命に関わるかもしれないという状況だったのです。私自身がそのことで苦しんだ時期があり、危機を脱したあともしばらくは、この分野の支援のことしか考えられなかった。

I：今はセクシュアルマイノリティ全般で支援している？

D：支援というとおこがましいですが、全般です。

I：それが広がったのはどうしてなんですか？

D：やっぱり、出会いですかね。そういうことやっていくうちに色んな人と会って、実際同性愛の方とか、ゲイの方、レズビアンの方とかにも会ったりしていくなかで、結局、誤解や偏見にさらされる辛さや、子どもの頃から抱えている生きづらさ、親へのカミングアウトの問題とか、苦しみとしては共通するものがあるなと。私の周囲の当事者の多くは、「ただフツーに生きていきたいだけ」と言います。そんなささやかなことすら、今の世の中では許されない。それを何とかしたいという思いに、変わってきました。

ここで、Dさんが支援始めた2010年頃にはLGBTという言葉は流通していなかったことが見受けられる。実際、「LGBT」が日本で広く流通し始めたのは2012年以降であったことは前に述べた。そのため、Dさんはトランスジェンダーと同性愛について、始めからひとくくりにとらえようとはしなかったようである。しかし、Dさんの支援対象が性同一性障害からLGBT、ひいてはセクシュアルマイノリティ全般に広がったのは「LGBTブーム」が起こったからではない。実際に様々なセクシュアリティの人と会って話を聞いていくうちに同じような苦しみを抱えていることに気付いたからである。

I: よく LGBT っていうと LGB は性的指向に関することで、T は性自認に関することで、一括りにしてしまうのは良くないっていう事を、当事者の方が言っているじゃないですか、そういうこともあるけれど、やっぱり共通していること、苦しみとかはあるなって…？

D: あるなって。思いますね。確かにそれぞれ全部違うんですよね、で、それぞれ違うってよりかは、まあそれぞれも違うし、個々を見ても全然違うんですよ。同じ FtM でも全然違う、ジェンダーX の人もいるし、その X の中にも全然違う悩みがあつて。だから本当に「個」だなという感じはしますね。本当に個人、個人それぞれの悩みを持っているっていう考え方…なんじゃないかなって思うんですよ。

I: ああなるほど。

D: カテゴライズできるっていうものでもないという感じがします。

どのセクシュアリティにおいても、それには同じ悩みもあれば違う悩みもあり、それは個人によって異なる。それはカテゴライズできるものではないと D さんは言う。そのために、相談者として悩みに向き合う際には、カテゴライズされたセクシュアリティを通してではなく、1 人の個人としてどういう辛さを持っているのかを聞くべきであるということだ。

B さんや C さんが指摘した LGB と T の分断に関しては以下のように語っている。

I: 「LGBT 就職支援」といっても LGB と T で困難って全く違いますが、どう対応していますか？

D: 結局のところ個人個人ですね、LGB の人も T の人も、やっぱり一人一人違うんですよ。抱えている悩みが。

I: はい。

D:もちろん就職においては T の人の方が現実問題として大変なことは確かです。でも実際の現場においては、セクシュアリティというよりも、周囲の環境やその人がもっている資源、能力や性格などによって、問題の程度も大きく変わると感じています。〔中略〕だからそれは環境と個人の差ですかね。〔中略〕

I: うん

D: だから個別ですねやっぱり。個別にやっぱりしっかり、何が壁になっているのかを聞いて、それに対する支援をするっていうのがすごく必要になる感じです。

ここでもやはり Dさんは、LGBとTで区分けするのではなく、あくまでも個人個人が異なる悩みに直面するのであって、個別に“何が壁になっているか”を聞くことが大事だと述べている。

では、「LGBT」で連帶することは何を意味するのだろうか。以下は「LGBT ブーム」について感じていることを語ってもらったものである。

I: 「LGBT ブーム」に関して何か感じることはありますか。

D: そうですね、なんていうかな…やっぱりブームっぽいと思うところはあって、どこまで本気なのかなっていうのはありますよね。ビジネスでやっているような感じはある。例えばゲイの人たちのマーケットでターゲットがすごく高所得者だったり。

I; エグゼクティブゲイ？

D: [中略] そういうところにビジネスの視点があって、それで盛り上がってる側面もやっぱりあるんだろうなって思うし。だから…生きづらさを抱えながらひっそり暮らしている人たちからすると、何やってるのかなみたいな感じはあるかもしれませんね。繋がってこない感じはしますね。

I: やっぱり生きづらさっていうのはまだ変わってない？

D: 全然ないですよね。[中略] そういうとこを考えると、何も変わってないんですよ。大手企業だったり、オリンピックに関わる企業は一生懸命やっているけど。現実にいる人たちっていうのかな、そこまで届いてないっていう感じはしますやっぱり。

Dさんもまた、「LGBT ブーム」には今までの被調査者と共通する違和感を持っている。企業やマーケットがどんなに盛り上がっていても、ブームの一過性に回収されてしまう。そこにもまたリアリティが想像されないために、“ひっそり暮らしている人たち”には“届かない”支援なのである。

「LGBT ブーム」は当事者にとって意味を持たないものなのだろうか。

D: 今のこの流れっていうか、オリンピックまではきっと盛んに色々取り沙汰されると思うんですよ。で、大手企業とか外資系企業とかも、オリンピックに関わる企業なんかも特に、そういうのをやろうとしているから、その機運にこっちも多少はのつかって、できることはこの期間にやらないっていうのはあります。

I：オリンピックを機に。

D：それまで〔2020 年の東京オリンピックまで〕は、LGBT ってことが取り沙汰される可能性があつて、それをうまくこつちがを利用して、進められることは進めていきたいなっていう感じですかね。〔中略〕だからこれを機に、例えば研修なんかをどんどんやっていこうなんて企業も中にはあるんですよね、だったらそれをどんどんやると。そうすれば知つてもらう人というか、理解する人は確実に増えますよね。だからそれに乗じてできることはやろうかなっていう感じ。で、ブームが去つて、何もなくなっちゃつても、私たちは引くわけにはいかないので。〔中略〕そのために支援してくれる人たち、理解してくれる人を増やしていこうと思いますね。

確かに 2020 年の東京オリンピックまでに空虚な「LGBT ブーム」が続くかもしれない。それでも“進められることは進めていきたい”と D さんは語る。例えそれがリアリティに乏しい取り組みであったとしても、「多様性のある日本」や「多様性のある会社」をアピールする材料であったとしても、今まで何もしてこなかつた社会が動き出していること自体に重大な意味があるのではないだろうか。そして、ブームが過ぎ去つても続いていく支援活動のためにこの機運を利用していくのだ。

I：今はブームで悪い面が浮き彫りになつてゐるんだと思うが、良い面もありますかね。

D：LGBT って盛んにいわれるようになって？

I：そうですね。

D：ひとつは、やっぱり世間の人たちが知るようになつたっていうのはいいんじゃないですかね。あのー、昔はそれこそ大変でしたからね。性同一性障害って言つても誰も、まあ言えばわかるくらいになつてましたけど。それでも LGBT つて言われるようになって、ワークウェイズプライド（WWP）だつたりね、企業の人たちが、それを問題視、人権問題とか、あとそれからグローバルっていうものの視点で見たときに LGBT の人がこれだけいるんだつたらお客様にもいるかもしない。取引先にいるかもしれない。そういうときにそういうの知らないと恥ずかしいし、なんていうかな、傷つけて、契約打ち切りになるかもしれないっていうリスク、そういう切り口でもいいんですよね、そういう切り口でもなんか考えなきやいけないねってそういう風になつてきてているのはすごく良いことだと思います。

I：なんかこう広告代理店とかが自分の利益のためってだけでもないような。

D：良いところもあるんじゃないかな。

「LGBT」が多くの場面で語られるようになったとき、それについて無知であることが企業の利益にかかわるかもしれない。「LGBT 支援」が企業のアピールに利用されることに B さんや C さんは嫌悪感を持っていたが、D さんはそういった“切り口”でも考えて取り組もうとするきっかけを持つことが重要だと述べている。

【非当事者へリアリティを伝えられるのか】

これまでの回答者からは、リアリティを持ってセクシュアルマイノリティを想像できないことが当事者との摩擦を生むということが述べられてきた。では、いかにして非当事者がリアリティを持って当事者を想像できるのだろうか。まず、D さんが行う研修の内容について尋ねた。

D：基本的には当事者に会ったことがないって人が多い。あとは性自認と性的指向の違いだとか、かなりごっちゃになっていますよね。イメージとしてはなんとなくわかってる、LGBT って言葉も知っているんだけど。テレビの影響で、ゲイの方が女装してたりするとなんだか分かなくなっちゃうみたいなんですね、どうもね。そこをきっちり正確に説明をすると、〔中略〕自分の意思でどうにかなるものではなくて、ある程度先天的なものなんだという風な伝え方かな。性自認と性的指向の違いと、生まれつきのものであるっていうその二点を理解していただくことで、多少は理解が進むかなっていう気がしますね。

I：やっぱりメディアのオネエキャラとかの影響は大きい？

D：おつきいですよ。ごちゃまぜになってるからみんな。いろんなものが。私の知り合いの多くのゲイの方は全然ああいう感じじゃないし、わからないですよ、たぶん。知らないうちに話している方のほうが圧倒的に多いですよっていうような感じですよね。「LGBTのこと知っているよ」と言いつつ、FTM とゲイの違いも実は知らない方もいて愕然としたことがあります。

〔中略〕誤解や偏見、固定観念をちょっとこう見直していただくことが出発点でしようか。

D さんが行う研修では主に“性自認と性的指向の違い”とセクシュアリティは“生まれつきのものである”ということを正確に説明しているのだそうだ。それは、テレビを始めとする

メディアに登場する「オネエタレント」を通してゲイを認識している人が多いためである。そういった“固定観念”を見直すところから始まるのだという。

I：研修もなさってる中で、手ごたえというか、受講生の反応は良いですか？

D：私が LGBT の理解と支援っていうテーマでお話をした時ってことですか？

I：はい。

D：それはすごく手ごたえがありますね。なんだろう、やっぱり当事者の話が一番効きます。やっぱり当事者に聞いてもね、例えば当事者だけど誰にも言わずにはそこに参加しているとするじゃないですか、その人からするとね、例えば何もその…知識的なコンサルタントが例えれば来たとして、「これから LGBT のことちゃんと理解しましょう」とかいっても全然響かないとか言ってました。

I：あ～。

D：同じこと言ってても。

I：はい。

D：それは、当事者が本当に抱えている言葉だったり、考え方とか、思いが語られて初めて通じる…っていうのがあると思いますね。だから誰が語るのかで全然違うんじゃないかなって思いますね。性自認と性的指向ってこうですよとか、LGBT ってこうですよとか、それそのものは特に難しい話じゃなくて、その行間にある色々言葉では表現できないような苦しさとか、個別なんだよ、人間としてこうなんだとか、そういう部分ですよね。

D さんの“その行間にある色々言葉では表現できないような苦しさ”とは当事者の実際の語りである。それは今までの回答者が述べてきたような社会に確かに存在する当事者のリアリティを意味するだろう。“知識的なコンサルタント”的語りはリアリティに欠けると想定される。リアリティに乏しい「LGBT」の認識は当事者の生きづらさの解消に繋がりにくいことは今まで述べてきた。このことは、“研修”においていかに非当事者にリアリティを伝えることができるのか、という問題と直結する。つまり、“研修”でリアリティが伝わるためには、当事者の語りが重要な要素となるのだ。

A さんは企業の”LGBT 研修”といったものに強く嫌悪感を示していた。それは講義を受ける者の中にも当事者がいるということがリアリティを持って語られないと想定されるからであった。支援者の側にある D さんはそのことについてどう考えているだろうか。

I：例えば新入社員に研修をするっていう時にも、その研修生の中にも当事者の

方がいることは大いにありますよね。

D：そうですね、だから大学の職員向けにもやっているんですけど、研修をね、そういう時は、13人に1人はLGBTだって電通が発表してるじゃないですか、そのデータをベースにして、一つ授業をやる、講座を開くにしても絶対1人はいるっていう前提でやってくださいねってお願ひはしているんです。

Dさんは「絶対1人はいる」というようなリアリティを持って講座をすることが大切であると語る。実際に目の前に当事者がいることを想定した語りは、そうでない場合と異なるものになるだろう。こうした地道で細かい気遣いこそがもっとも重要なもののかもしれない。例えば後に述べるように、当事者と非当事者の微細なコミュニケーションに関しての再検討（寛容性を持つ教育だけではなく、完全に分かり合えない異質な他者との関係についての反省）が必要となるだろう。

【アライについて】

AさんやBさんは「アライ」に関して距離を置いていたようだったが、「支援者」の側に立つDさんはどう感じているのだろうか。

I：アライに関してはどうですか？

D：大事ですね。支援者の存在もすごく大きい。そういう人たちがたくさん増えた方が良い。だから当事者が誰かっていうことよりも、むしろアライが誰かっていうのを可視化したほうが良い気がする。当事者を無理に可視化なんてできないからね。〔中略〕だから、アライを可視化させるほうが大事なんじゃないかっていう気がしますね。

I：テレビでアライの特集を見たんですけど、アライのマークをオフィスのデスクに貼っているような。ああいうのは大事？

D：大事ですね。〔中略〕見る人が見たら、ほっとするかもしれない。

Dさんは「アライ」の存在は“大きい”と語る。そして、当事者よりも“むしろアライが誰かっていうのを可視化したほうが良い”と、「アライ」の可視化の重要性を語る。当事者を可視化していくことは当事者自身に大きな負担が伴うことがあり、無理にできるものでもない。だからこそ、「アライ」を可視化することが重要になる。「アライ」のマークを身につけている人を見つけて、その意味が分かる人が少しでも安心できるならそれは生きづらさを

緩和するものになりうるかもしれない。

ここで重要なのは誰が「アライ」を名乗るのかということである。

I: そのアライのマークって研修とかを受けるともらえるものなんですか？

D: それもすごい疑問って言ってますね。当事者の人は。パレードでアライのシールを配っていたみたいで。これでアライになれるの？って疑問は感じたって言ってました。「にわかアライ」みたいな（笑）。

I: 「にわかアライ」（笑）。

D: そうそうそう。本当に理解しようとしてくれてるのかな、やっぱりそれもブームに乗ってる感じ？おしゃれみたいにね。本当のことを理解していないのに「アライですよ」って言ってる人もいて、そこはちょっと疑問って言ってましたね。

I: 「理解しますよ」ってちょっと上から目線ですもんね。

D: そうですね、理解はできないと思うんです。〔中略〕本人の苦しみなんて本人にしかわからないから、わかんないっていう謙虚さが必要かなって思つていて。〔中略〕そういう謙虚さというか、支援者として自分は絶対 100% 理解できないんだって思っていることがすごく大事で。〔中略〕

I: 分かった氣でいるのが危険ですね。

D: 分かったふりされるのが一番むかつくとか言われるんですよ。私も、そうだよなあとか思って。

「アライ」の重要さを語る D さんもまた、容易に己を名乗ってしまうことの危険性を示唆している。簡単に手に入るマークひとつで“分かったふり”ができてしまうのであれば、とたんにその名乗りは意味を失ってしまう。“本人の苦しみなんて本人にしかわからない”ということを前提に、「アライ」の立ち位置を改め直す必要があるのかもしれない。

【SOGIについて】

I: SOGIって言葉ありますよね、使うことがありますか？

D: 研修の中ではこういうカテゴライズもありますよって、LGBT が全てではなく、マイノリティはこれだけじゃありませんよって使います。LGBTs って言う場合もありますし、あとは生まれた時の、出生の時につけられた性別ってあるじゃないですか、そこすらも危うい人がいるわけですね。身体の性のところで

I：インターフェックス？

D：そうそうそう、そういう人たちもどうするかって話もあったりして。かつ、ストレートって言ってる人でも、よくよく考えてみるとちょっとブレがあったりとかね。そういうのも含めると全員がそこにどっかに入るんじゃないみたいな。そういう考え方もあるのかなって。気はしますね。

I：他〔研修以外〕では使いますか？

D：あんまり使われないです、一般的ではないですやっぱり。ただそういう考え方もありますよっていう使い方かなあ…一応。

I：うーん。

D：言葉は変化していくと思うんですよ。結局この2年ですごい変化したからね

DさんはSOGIについて、LGBTだけで全てを指しているのではないといったことを説明するのに用いることがあるそうだ。L/G/B/Tに属さないセクシュアルマイノリティ、引いては自らのセクシュアリティを立ち止まって考えたことのない人々をも含み、“全員がそこにどっかに入る”枠組みとしてSOGIがある。しかし、全てを対象にすることは、全てを指していないことでもある。そのような当事者性のない言葉は一般的に使われないというのが現状のようだ。

【トランスジェンダーの話】

I：トランスジェンダーって一口に言っても分類されるじゃないですか、でその中で微妙な関係性がある、マイノリティがマイノリティを排除してしまうような動きについてはどう考えてらっしゃいますか。

D：結構ありますよね。〔中略〕たぶんそれは価値観とか考え方ひとりひとりの違いだと思うんですよ。それをみんながそれもありだよねって全部受け入れられればいいんだけど、たぶん一人一人が苦しいから、受け入れられないのかなって感じはしますね。

I：もう少し詳しく教えてください。

D：余裕がないのかもしれない。自分のことで精一杯で。〔中略〕自分が受け入れられなくて他者を受け入れられないですよね。基本的にね。もう余裕がないわけだから。そういう苦しさがゆえにたぶんそういうことになるんだと思います。

I：なるほど。

D：〔中略〕自分の辛さから結局他者を攻撃してしまうってことはあるわけです

よ、「いいじゃないあんたは」みたいな感じで「私はもっと苦しいんだから」みたいなね。それってそれを言ったあとにやっぱりものすごく苦しい思いをしているんですよね。

I：あ、そうなんですね。

D：そういう自分を、嫌な自分だと思うわけですよ。自分も相手も認められたらすごく幸せなんだけど、できない状況にあるからそういうことが起きているんだと思いますね。一緒に支援活動をしているトランスジェンダーのメンバーたちは、とてつもない苦労を経て性別変更をしていますが、いろいろな生き方があっていいじゃないかという考え方で、医学的な治療や性別変更を望まない人も含めてどんな人も受け入れています。それはやはりいろいろな経験を経て周囲に感謝する気持ちを持つことができて、自分に対する自己肯定感、自尊感情をしつかり持っているからではないかと思うんです。

I：じゃあ差別をしてしまうその人に必ずしも要因はないというか…。

D：そう思います、ただ本人の性格というか、物事の見方、捉え方もあると思いますね。しかしそれも環境との相互作用で成長、変化する可能性はあると思います。

Dさんはトランスジェンダー内で「性別変更に一生懸命な人」が「そうでない人」を排除する動きについて“自分のことで精一杯”で“余裕がない”といった“辛さ”から“結局他者を攻撃してしまう”的と述べている。ここで“攻撃”的矛先に当たるのはマジョリティではなく、マイノリティの中でもさらにマイノリティとされる「性別変更に一生懸命でない人」である。少なくとも彼らがさらなるマイノリティを生み出し、排除してしまうのは、彼らに固有の性格といった要因があるわけではない。そこには GID として医学的精神疾患としてトランスジェンダーが捉えた歴史、「性同一性障害」のキーワードがブームとなったことによる「なんちゃって」の増加などの背景が大きく関わっている。

3-5. インタビュー総括

3-5-1. 「LGBT ブーム」について

現在日本で巻き起こっている「LGBT ブーム」についてインタビュー調査からは、2-2 で述べたようなマーケティング市場として LGBT が「活用」されているということをそれぞれが如実に感じ、不信感を抱いているということがわかった。どんなにブームが盛り上がっても、実際に身の回りを見ても何も変わっていないといった発言も目立った。それ

らは「リアリティ」を持って LGBT を始めとするセクシュアルマイノリティが存在するということが非当事者には想像できていない、ということを当事者がいまだに感じているからである。

さらに、「LGBT が自分たちのことを指している気がしない」といった当事者の発言は、ブームが「LGBT」という名の“別の星の人”を作り上げてしまっていることを指摘している。自らの名乗りとして当事者によって生み出された「LGBT」は、日本においてその主体性を失ってきているのかもしれない。

ただし、ブームが起こっていること自体には肯定的な発言が多かった。たとえブームの中だとはいえ、行政が同性パートナーに対する証明書を発行し始めたことはこれまでの日本の法と政治という権力の中で考えられなかつたことであり、ブームで終わらせたくないといった発言も見られた。Dさんは例え企業や行政のアピールに使われる空虚な「LGBT ブーム」という部分があるにしても、セクシャルマイノリティへの認知度を上げ、深めていくという点で“進められることは進めていきたい”と述べる。どんな切り口であってもこのように「LGBT」が取り沙汰されるということ、集団が動き出しているということ自体の重要性を見出している当事者やその周辺の人たちも存在するということである。確かにブームは当事者にとって違和感のあるやり方で巻き起こったものかもしれない。しかし「LGBT」という言葉を多くの人々が認識し、ステレオタイプな態度に気付かされ反省すること自体は大きな進歩なのかもしれない。

3-5-2.LGBT というカテゴリーは何をもたらしたか

カテゴリーでひとくくりになっているとはいえる、「LGBT の人」が存在するわけではない。インタビューの中で Bさんが述べた「LGBT 男性」といったメディアでの表象は、「LGBT」というカテゴリーそのものが何者であるかを説明してしまうような意味合いを持ち得ているということを示しているだろう。「LGBT」という集団が存在するわけではないということを改めて確認するために、欧米では「L/G/B/T」と表記されることもある。これは、「L/G/B/T」がそれぞれ独自のコミュニティをもち、必要であれば連帶するのだという考え方方がしっかりと基盤に存在するからだ（三橋 2015:第 19 段落）。しかし日本ではその間の仕切りが認識されることなく「LGBT」と「非 LGBT」がいるというような短絡化、思い込みが流布されてしまっているのではないか。インタビュー調査で Bさんはゲイとレズビアンのコミュニティが混じり合うことはないと述べていたことや、自分のセクシュアリティ以外のことは何も分かっていない人もいるという Cさんの発言からも、「LGBT」という集団など存在しないということがわかるだろう。L/G/B/T はそれぞれで独自のコミュニティ、文化を築いてきたのである。さらに、バイセクシュアルがレズビア

ンやゲイから「裏切り」だと差別されることや、「LGB と T は分けるべき」という発言もあるようにそれぞれの関係は複雑である。さらに LGBT を表記する際には L,G,B,T 以外のセクシュアルマイノリティを含む広義の意味であるといった補足が必要であり、そういった説明なしに安易に言葉を使用してしまうことは問題であるとする立場もある。

さらに A さんが指摘した「LGBT=困っている人」という切り口で語られる「LGBT 支援」という言葉があるように、セクシュアリティを“障害”とみなし、それを「頑張って乗り越えようとする」ような「LGBT 像」を期待されることも問題であるという。砂川秀樹によれば、マジョリティが常に様々な側面を持ち、揺れや矛盾が許されているのに対し、マノリティはその主体性の構築において、一枚岩的、一貫性のあるようなアイデンティティに基づいた主体化が求められるという。そしてそのようなアイデンティティを求める力こそがマイノリティに向けられている最大の抑圧ではなかろうか（砂川 2015:104）と述べている。

しかし、それでも「LGBT」が一つの連帯として社会に浸透したことにはそれなりの意味や必然性があったはずである。例えば、C さんの所属するサークルには LGBT サークルとして様々なセクシュアリティの部員がいる。そこではそれぞれのセクシュアリティごとにコミュニティが分かれているのではなく、サークル全体で一つのコミュニティとなっている。C さんのサークルは解放運動や啓蒙の「活動」をするための集団ではない。気軽に話ができるような居場所としての「緩い連帯」である。アウティングを嫌がるメンバーが多いいため非公式のままでいる大学のサークルは少なくないという。

これに対して「特定非営利活動法人 ReBit」のように社会に対しては発言をする連帯となって LGBT に関する啓発活動を積極的に行う団体も存在する。

「LGBT」の連帯にはこれらの緩いコミュニティや、積極的に活動をするコミュニティなどと目的によって分離し、流動的であることが必要だろう。

3-5-3. レズビアンの不可視性

① ブーム以前の不可視性

レズビアンに特有の不可視性があることがレズビアン当事者へのインタビュー調査で跡付けられた。同性愛といえばすぐに思い起こされるのは男性間のゲイであろう。女性同士のレズビアンがゲイと同等に注目されたことがあっただろうか。例えば、テレビを始めとする多くの人が目にするメディアでは「オネエタレント」と呼ばれる人々が活躍する。彼（彼女）らはいわゆる「女っぽい」身振りや服装をしており、恋愛対象が男性であることを公言している。それはゲイとトランスジェンダーの微妙な間にいるように感じられるが、重要なことはそれらが全て男性であることだ。そのように笑いの対象としてセクシュアリティが消費されることを見過ごしてはならない問題ではあるが、

たとえそのような自虐的な露出の方法でも、レズビアンがメディアで取り上げられて広く世間に知れ渡ったことがあつただろうか。インタビューで Aさんはレズビアンだからといってその固定観念に“決めつけられて不快だと思ったことはそんなにない”、むしろイメージそのものがないのだと言っている。レズビアンは、「LGBT ブーム」の中で可視化される動きを持ち得ないのだろうか。

日本においては、今から 20 年前、アクティビストでもあった掛札悠子がレズビアン差別の特徴を「不可視性にある」と言い切っている（杉浦 2010:58）。さらに堀江有里は、レズビアンは不可視なだけでなく、存在自体が男性支配の歴史の中で「抹消」されてきたと述べている（堀江 2014:80）。事情はアメリカでも少し前まで変わらなかつたという。1980 年代にゲイのアーティストはアンディ・ウォホールなどが話題になつても、レズビアンのアーティストは、写真家アニー・リーヴォビッツなどの例外を除くとほとんど黙殺されていたという⁽¹³⁾。

では具体的にレズビアンの不可視性とはどのような場面で見られるのだろうか。

フジテレビ系で 2008 年 4 月から 6 月に放送されたテレビドラマ『ラスト・フレンズ』では、中盤まで明らかに女性から女性へ向けられたレズビアン的欲望が描かれる。だが終盤で一転してレズビアン的に表象されていた女性が性別違和を強く持ち、男になりたいという欲望を打ち明ける。つまりこれまでの同性愛と思われた欲望は「男の」異性愛的欲望として理解されることとなるのだ。脚本を書いた浅野妙子はインタビューで、レズビアン的要素を性別違和として描いた理由についてこう語る。

ストレートからすると、まずレズビアンと性同一性障害の区別がいまいちつかないというところがあるんですね。なので、どっちともはつきりは言えないけれど、まずは「性同一性障害」にしておこう、と考えました。というのも、ドラマ『3 年 B 組金八先生』で、上戸彩が性同一性障害を演じてクローズアップされたので、その言葉のほうが日本では認知度が高いのもひとつの理由でした。（中略）性同一性障害のほうがレズビアンよりそういう面で共感を得やすいかなと思ったんです。そういう戦略的な意味もあって、レズビアンというよりも、性同一性障害に傾いたわけなんです。（中略）実は、最初に脚本を FtM の方に見せたら、「これってレズビアンじゃん（笑）。レズビアンだと何でいけないの？」と即答されました（笑）。でもなんかやっぱり一般の人によりアピールするときにはこの言葉が必要だと感じたので、言葉として「性同一性障害」という単語を残したいという意図でした（カイザー雪 2008:第 7 段落）

脚本を担当した浅野は、レズビアンを描いていると自身では分かっていないながらも、視聴者が理解しやすいように当時から話題性のあった「性同一性障害」にすり替えた。これは、2000年代後半には性同一性障害というキーワードが社会に行き届いていた¹⁴ということを示すだろう（2-3図1）。しかし一方の同性愛、とりわけレズビアンは、批判の対象になることもなければ積極的に受容されることもない、そして話題になりにくいキーワードであったという言葉から、レズビアンの不可視性をみることができる。同時に、作り手によって意図的に「抹消」された=不可視性が強化されてしまったとも言いうことができる。

日本でレズビアンであることをカミングアウトした有名人がいなかったわけではない。80年代後半に「東京少年」というロックバンドで人気を博した笛野みちるは、ソロデビューした際に自分がレズビアンであることを世間にカミングアウトした。しかし、その後発表した女同士の恋愛を描いたアルバムは全く受け入れられなかつた。また、60年代後半から歌手として人気だった佐良直美は、同性愛疑惑のスキャンダルが報道された1980年から途端にメディアに姿を見せなくなってしまった。こうして少しでもレズビアンだと思われたり、カミングアウトしたりする有名人は社会に全く受け入れられずに「居ないもの」として「抹消」されてきた歴史がある¹⁵。

存在が見えないということは、社会に認識されないということである。堀江（2015）は『レズビアン・アイデンティティーズ』の冒頭で「自己の存在を人（他者）から認識されないことは、誰にとっても、その〈生〉——“生きている”こと、そしてそれをめぐるさまざまな事柄——を無意味だと実感する出来事なのかもしれない」（堀江2015:20）と述べており、自己の存在を認識されないことが人間の実存にもたらす危険性を示唆している。

② 「LGBT ブーム」を経験して

これまで「LGBT ブーム」以前に日本でみられたレズビアンの不可視性について述べてきた。では、ブームを経て、レズビアンが可視化に影響を及ぼすような事象はなかつたのだろうか。

2015年、渋谷区の同性パートナーシップ条例が公布された際に証明書の取得第一号としてメディアに大きく取り上げられたのは元タカラジェンヌと会社経営者の女性カップルだった。この二人が行った東京ディズニーランドで史上初となる同性結婚式は多くの注目を集め、様々なメディアで写真や映像付きで報道された。これまで顔や実名が公になることがほとんどなかつたレズビアンが、大々的に報じられたのである。さら

に、2015年11月から12月にフジテレビ系で放送された『トランジットガールズ』は、連続ドラマ史上初めてレズビアンをテーマに描かれたものとして作られたものだ。前述した『ラスト・フレンズ』では抹消されたレズビアンが主題として堂々と描かれたのである。さらに、ここ数年では女性の人気アイドルたちが同性愛を思わせるような親密性をアピールする「百合商法」が多く流通している。レズビアンはブーム以前に比べ、メディアに登場するようになり可視化されたとは言えないのだろうか。

ここでBさんの発言をもう一度参照したい。

B：これはストレート寄りの発想だけど、女の子同士の恋愛はポルノとか綺麗なもの、ファンタジーとして消費してる現実がある。憧れとか。綺麗なファンタジーのままで止めたいみたいな。

Bさんは、女性同士の恋愛は“綺麗なもの”や“ファンタジー”として“消費”されていると述べている。例えば女性アイドル同士の「いちゃいちゃ」、視聴者に見せる仲間同士の親密性は、消費の対象として意図的に組み込まれた“ファンタジー”なのだ。そこで彼女らがレズビアンであるか否かという問いはそこでは重要視されない。さらに、レズビアンカップルとして報道された元タカラジェンヌと会社経営者の女性も、メディアに報道される際はその美形の容姿が強調される。さらに「東京ディズニーランドで結婚式」という見出しの記事はどこか“ファンタジー”で現実味のない“綺麗なもの”という印象を世間に持たせるだろう。実際、レズビアンとして彼女らの他にメディアに多く登場する者は依然として現れていない（アクティビスト＝運動家として文筆活動をするレズビアンは増えてきている）。

このように、近年でも女性同士の親密性を“綺麗なもの”や“ファンタジー”として消費する動きは依然としてあり続ける。女性間の親密性は消費され、美形で“綺麗な”カップルしかレズビアンとしてメディアに登場しない。未だレズビアンは、女性間のリアルな同性愛としてではなく、“綺麗な”女性同士の親密性として非当事者の資本主義の中に巻き込まれてしまっているのではないだろうか。

そして、このような女性間の親密性が消費の対象として社会に流布されれば、たとえ街中で女同士が腕を組んで歩こうが、恋人のように抱き合ったりしようが、人々はそれがレズビアンである可能性を想像することもないだろう。さらに、その状況の中で女性自身が同性に恋愛感情を持って接していても、「女性特有の親密性」に還元されて自らをレズビアンだとは自覚しない可能性もある。このようなメディアはレズビアンの不可視性を生み出すと同時にレズビアンの存在の幅をも狭めてしまうのだ。

③ホモソーシャリティとホモフォビア

なぜレズビアンが見えづらいのだろうか。杉浦(2010)は男性ホモソーシャリティとホモフォビアについてのイヴ・K・セジウィックの議論を引用しながら論じていく。「ホモソーシャル」とは同性間の社会的・政治的な絆を表す語である。そして男性のホモソーシャリティとは男性の利益を促進し、父権制を支えるものである(杉浦 2010:63)。現代においても、男性のホモソーシャリティへ向かう欲望はさまざまな場面で見られる。さらに重要なのは、ホモソーシャリティには「ホモセクシュアルな欲望」が「潜在的に切れ目の無い連続体を形成している」(セジウィック 2001:3)ことだ。そして父権制を維持するためにはそのような「ホモセクシュアルな欲望」を排除する必要があるとした結果、ホモフォビア(同性愛男性に対する嫌悪)が生まれたのである。西欧近代では、こうしたホモフォビアを表明することで逆説的に自らの異性愛を主張し、ホモソーシャリティをより強固なものとしたのであった。これに対して「女同士の絆」にはその区分けが見られないとセジウィックは述べる。

たとえば私たちの社会では、男性に比べて女性の場合、「ホモソーシャル」対「ホモセクシュアル」という弁別的対立は、遙かに不完全であるし二項対立的でもない。今というまさしくこの歴史的瞬間、女性同性愛とそれ以外の女性同士の絆——たとえば母娘の絆、姉妹の絆、女同士の友情、「ネットワークづくり」、フェミニズムの活発な闘争など——は、目的・感情・価値観を軸にして明らかに連続体を形成している。〈中略〉政治的立場がいかに対立し、感情がいかに衝突しようとしても、女を愛する女と、他の女の利益を促進する女は、相互に重なり合い、密接に関わり合うことをしているのだ(セジウィック 2001:3)。

つまり、女同士の絆は見えづらく、見えたとしてもその質は問われない。男性中心の父権制の中で女同士の絆は重要なものではないとされるからだ。女同士の曖昧な関係はホモソーシャルとホモセクシュアルのようには、明確に分別されない状態にある。これによって社会はゲイの存在を真っ向から否定し排除する一方で、レズビアンに関してはその存在を想像しようともしない。

確かに人々は「LGBT ブーム」の影響で少なくとも「L」についても知識として認識はじめているかもしれない。しかし、レズビアンに対する想像力は未だに乏しいもの

だということは A さんや B さんの語りからもわかる。それは“綺麗なもの”として消費されることでしかメディアに登場しないことによるレズビアンの不可視化が要因のひとつである。同時に男性では非難の対象となるのに対し、女性間の親密性が当然のごとく受け入れられることは現代でもホモソーシャルな権力関係が存続しているということを意味するだろう。ただし、これが過渡的なものか永続的なものなのかはさらなる考察の余地がある。

3-5-4. 「アライ」の可能性

「アライ」とは前述の通り、LGBT を支援する非当事者を指す言葉である。三部 (2013:101) によれば“ally”とは同盟者を意味し、セクシュアリティではマジョリティであるが、セクシュアルマイノリティを擁護する異性愛者を指す言葉として英語圏で使われるようになったという (Ji,Du Bois and Finnessy 2009:402)。さらに、「ノンケ」がしばしばセクシュアルマイノリティ側から異性愛者を突き放す意味を込めて使われるのに對し、活動を支援する異性愛者は共感をこめて「アライさん」と呼ばれることもある (三部 2013:101)。現在ではオフィスに「アライ」のマークを掲げ、会社全体で LGBT への理解があり、支援する姿勢があることへを表明する企業もある。

「アライ」に関してはインタビューから様々な見解が見られた。D さんは支援者の存在の重要さを指摘し、非当事者の中から「アライ」を可視化していくことが大事だと述べた。同時に D さんは、「アライ」を名乗ることには“理解していますよ”というような上から目線ではなく、“わかんないっていう謙虚さ”が必要であることに注意するべきであることも示唆している。これは A さんが示した「アライ」に対する嫌悪感にも関係しており、安易に「理解者である」と名乗ることができてしまう仕掛けには注意しなければならないだろう。

D さんも指摘していたが、先日開催された「東京レインボープライド 2016」で電通ダイバーシティ・ラボが運営したブースでは「 GET!A-License (アライセンス)」と題したイベントが行われた。これは、「アライ」であることをチェックする簡単なテストに答えると、「電通ダイバーシティ・ラボ公認ライセンス」がもらえるという仕組みだった。つまり、そこを訪れた者が誰でも簡単に「アライ」と名乗ることが可能となるのだ。しかし、このように安易に「アライ」と名乗ることは、セクシュアルマイノリティについて考え続ける不断の努力を断ち切ってしまうものではないか。“わかんないっていう謙虚さ”を持つということは、当事者と非当事者との関係や距離、コミュニケーションについて絶えず再考し続けるということでもある。しかし現状では、「同盟者」として当事者の側に立つて支援を行うはずの「アライ」の表明が、このような経済システムによって当事者から距

離を置かれることとなってしまっている部分もある。「アライ」の表明が当事者にとって嫌悪感や距離感を抱かせるだけになってしまうのは問題である。

ここで C さんの事例を参照したい。C さんが所属するセクシュアルマイノリティの当事者が集うサークルには、「アライ」を名乗る非当事者が存在している。そして、「アライ」を名乗る非当事者と当事者との間には距離がなく、特に区別せずに一つのコミュニティとして機能しているというのだ。ここで当事者と非当事者と同じコミュニティに内在させることができるとされるカテゴリーとして「アライ」が存在していることがわかる。C さんはサークルに所属する「アライ」には好印象を抱いているようであった。「アライ」は当事者と非当事者の距離を縮め、共存することを可能にする場合もあるといえよう。

日本ではブームの一環として流通した「アライ」であるが、そうした当事者と非当事者とが共存できる可能性は確かにあるだろう。カテゴリーは常に権力化し、陳腐化していくものであることは「アライ」にも共通する点として留意しておくべきことではあるが、セクシュアルマイノリティの人々が「普通に暮らす」ために信頼できる同盟者となることはできるはずだ。

3-5-5.セクシュアリティとアイデンティティ

当事者である A さん、B さん、C さんに共通して述べられたのは、自らのセクシュアリティはあくまでも“一部”であってそれがアイデンティティの全てではないということだ。このような主張は、カミングアウトすることで周囲の人々が当事者をそのセクシュアリティのフィルターを通してでしか見ようとしない、もしくはそう見られてしまうだろうと想定されることを裏付ける。セクシュアリティが何であるかの前に「あくまでも私は私」という主張はそのフィルターをかけて自分を認識されることへの抵抗であろう。レズビアンであることを公表しているタレントの牧村朝子は「LGBT という概念さん、さようなら」(牧村 2015:74) と宣言する。

だからといって、セクシュアリティというアイデンティティをすべて手放すというわけではない。B さんは、カテゴライズは“安心感”を生むものもあると述べている。自分が何者であるかを言語化し、同じカテゴリーに属する者同士でコミュニティに属したりするということが“安心感”を生むということは確かにあるだろう。

さらに、C さんと D さんのインタビューではトランスジェンダーのアイデンティティについて触ってきた。トランスジェンダーの中には、「一生懸命トランスしている人」と、それらと差異化を図るために「なんちゃって」というカテゴリーがある。C さんのインタビューでは、“一生懸命やってる人たち”が“なんちゃって”を批判するのは「多数派」になるために「完治」したいからではなく、自らのアイデンティティを確保するためだと論じ

た。それは「一生懸命トランスしている人たち」が自分の行いを正当化するためであるとも言えるだろう。

さらに、「性同一性障害」という言葉がトランスジェンダーよりも先立って流通した日本においては、性別を医療的に移行しようとする人たちの全てを「病気」とみなす認識が広まっている（三橋 2010:162）。そしてそれに対抗するようにトランスジェンダーは、脱精神病理化を目的とする当事者運動から生まれた概念であるという側面がある（東 2015:68）。自らの病識なしに病者とみなされてしまうことからの脱却として、トランスジェンダーのアイデンティティを持たざるをえない者もいることを明確にするという意図もこめられている。

3-5-6. 寛容性概念について

① 「何も変わらない」のはなぜか

インタビューでは、「LGBT ブーム」が起こっていることは認めるが、現実的には何も変わっていないのではないかという事が指摘された。Aさんの“テレビとか自分の親とか、広く見ると何も変わってないよ”という発言からは、ブームが起きていてもなお根強くあり続けるセクシュアルマイノリティへの偏見、ステレオタイプが見られるだろう。さらにDさんの“何も変わってないんですよ。〔中略〕企業は一生懸命やっているけど。現実にいる人たちっていうのかな、そこまで届いてないっていう感じはします”という発言からは、どんなに企業などの取り組みが進んでいても、現実に暮している当事者にとっての「生きづらさ」が依然としてあるということを物語っている。

これには、「寛容」という言葉で「LGBT」を受け入れようとする社会の風潮が影響しているのではないだろうか。そこで、まず「寛容」という概念をおさえていく必要がある。

② 「寛容」とは何か

日本は LGBT に寛容か否かといった問い合わせの中では、当然のごとく寛容=善という前提に立って話が進められる。しかし、寛容性概念そのものが権力性を持つということについて風間は指摘する。

寛容は多くの人が追求すべきものであり、目指すべき理想と考えられている。
だが、寛容がそれを与える側と与えられる側から構成されていることを考え
れば、平等と相容れない思想・態度であることは明白である（風間 2015:265）。

つまり寛容とは、ある上下関係を前提とした上で成り立つものであり、はじめから不平

等な関係が内在しているのである。寛容を多くの人が追求するべきといった言説は、そこに働く不平等な関係性を正義によって押し進めてしまうものになり得るのだ。

さらに「寛容」は単に無関心の表れだという分析も行われている。社会心理学者針原素子の調査によると、私生活志向が低い（他者への関心が高い人）ほど寛容性が一般的信頼や広いネットワーク、多様な集団加入などの社会関係資本と結びつくという。つまり、それらへの関心を持たずに私生活のみを重視している人においては、他者への「寛容性」は単なる無関心の表れとしての、「どうでもよい」が故の「寛容」を意味しているというのだ（針原・小林・高木 2009:669）。この無関心の表れとしての「寛容」が日本社会で特に強いのならば、2-4 で示した同性愛者に対する寛容性の高さがこれによって説明できるかもしれない。

以上のように、今回のインタビューで当事者が、非当事者の「寛容性」の上昇について、歓迎とともに口々に表明していた違和感は、(1)寛容性という概念の持つ権力性に由来するものなのか、(2)他者や社会に対する無関心の表れで説明できるだろう。「寛容」的態度が読み取れるインタビューデータをもう一度参照する。

A：割とまあ、よく感じたのは、「全然いいと思うよ、大丈夫」とか、「友達にもそういう人いるし」、「あたしもうゲイの友達いるし、むしろいいことじゃん」とか言うんだけど。

B：私が信じてないのはカミングアウトした時に「あたしゲイの友達たくさんいるから大丈夫」っていう人で。それがイコール差別しないことに繋がらないから。そういう子に限ってゲイの友達がたくさんいることを自慢するから。大丈夫って言われても何が大丈夫なの？って。

相手が“大丈夫”と言うことで一見承認する態度を取ったとしても、それが A さんや B さんに嫌悪感を持たせるということはこれまでの考察で論じてきた。そしてその嫌悪感は、風間が指摘する寛容的態度が持つ権力性から生まれるものなのではないだろうか。異性愛者はセクシュアルマイノリティを発見した瞬間に彼らを「承認するか否か」の対象として認識し、その上で“大丈夫”と発言する。ここで、当事者が無条件に「承認される側」に立たされてしまうということは、必然的に非当事者との間に上限関係を生み出すことになる。このように「寛容」という概念は、初めから不平等な関係を前提としているものであり、そのような態度が当事者にとっての嫌悪感を生みだすのだ。そして、レズビアンである当事者に対して“ゲイの友達いるから”という理由のみで“大丈夫”と受け入れよう

とすることは、それ以上知ろうとしない無関心さを表すだろう。AさんやBさんが感じる嫌悪感、違和感はこのように（多文化主義の基本的な理念である）寛容性概念がもつ権力性と、（日本文化で特に強くなる）無関心さが複合して生じているのである。そして「寛容=善」と無条件に肯定するような社会のなかで、このような当事者との微細なコミュニケーションのズレを自覚することは、一層困難を極めるだろう。だがこのように当事者のミクロな感覚と、多文化主義や日本社会の社会意識というマクロな状況の双方にきちんと向き合う必要がわれわれにはあるのだ。

第4章 結論

4-1. カテゴリーという権力をこえてー「LGBT」の功罪

「LGBT」というカテゴリーができることで、そこから排除されるものが出てきたり、L/G/B/Tのそれぞれの複雑な関係性がより顕在化されたということを、本研究では先行研究とインタビューにより明らかにしてきた。初めは当事者による主体的な名乗りだったはずの「LBGT」は日本における「LGBT ブーム」の中で商品化され、その主体性は彼らの手からこぼれ落ちそうになっている。

ハッキング(2012)はいかなる分類もわれわれ人間が作り出したものであるというような極端な社会構築主義を批判し、多くのカテゴリーは人間の精神ではなく、自然の内にその起源を持ち、一度定着すれば固定するような静的なものでなく、分類されるものと相互に手に手を取り合って発達していく「動的唯名論」を主張している（ハッキング 2012:222）。すなわち、カテゴリーとそれに分類されるものの関係は常に流動的であり、変化していくのだ。いうなればカテゴリーとの関係はある程度は変えていくことができるのだから、そこで発生する様々な問題に対して常に策を検討する営みが重要になる。

一つの方向性としては、「LGBT」でこぼれ落ち排除されるものをすくい上げるために、「LGBTs」や「LGBTQIA」、あるいは「SOGI」などと代替案を提示し続けること（例えそれが代替案に満たなくても）だろう。その際には「LGBT」が主体性をもって誕生したものであるという歴史性やその陳腐化、政治化、企業や行政が「多様性」を主張するための材料ともなりつつあるという商業化等は常に意識しておく必要があるだろう。

バトラー(1999)によれば、フェミニズム運動において「女」というカテゴリーの中身をまえもって定めないような連帯の政治をうちたてる試みが、民主的な運動に有用だという。逆に言うなら、運動において前もって連帯の一貫性や統一性に固執することは、文化的、社会的、政治的な交錯の多様性を無視してしまうことであるということだ。

人々のあり方は多種多様であるはずだということを主張するはずだった「LGBT」でさえも、「LGBT らしさ」を外部、そして内部から強要されてしまえば、その運動の意味を見失ってしまうだろう。バトラーは、そもそも連帯とは、「その内部の矛盾を認め、それはそのままにしながら政治行動をとるはずのもの」(バトラー 1999:42) だとし、さらに「対話による理解が引き受けなければならない事柄のひとつは、相違や亀裂や分断や断片化を、しばしば苦痛をともなう民主化のプロセスのひとつとして受け入れることではないか」と述べる(バトラー 1999:42)。多様なセクシュアリティの立場がとりあえず集合している形態では、それがどういうものなのかを前もって思い描くことは不可能である。だが、とりあえずの連帯という枠組みの中では、様々なセクシュアリティが各々のアイデンティティを表明しうる対話的な出会いの場をもたらすことができる。「LGBT」というコミュニティに参加することで多様なセクシュアリティを表明する人々と出会い、対話することは決して過小評価するべきではない。それは異性愛者である「アライ」も含めることができるだろう。ただし、そこに発生する様々な相違を（地道な、賢明な）対話によって苦労を伴いながら引き受けなければならないし、常にお互いの態度について再考し続ける丁寧なコミュニケーションが必要である。連帯は矛盾を内在させつつ政治行動をとるというバトラーに対して砂川は、一つの活動がその中に生じる矛盾によって分離することは、望ましいものではないが強く否定されるものでもなく、共存不可能な矛盾があれば、その時は分離して新しい活動を始め、同じミッションで一致できるときは共に活動する姿勢が重要であるという（砂川 2015:105）。

活動の中で生じる矛盾は、マイノリティを一枚岩化しようとする抑圧に対する最大の抵抗であり、いわば必然的なものである。具体的な事例を挙げるとするならば、渋谷区の同性パートナーシップ条例を「ピンクウォッシュ」だという批判があることは当然のことである(2-3)。もしそのような思惑をもって実行されたとしても、同性パートナーに対する証明書を発行できる日本で初めての条例がついに公布されたということに対する希望を抱く者もいる。その両者の意見は共に批判されるべきではないし、自分がどの立場であるかを意識して分離していくべきだろう。

4-2. 寛容性の罠をこえて

寛容性については先に(3-5)述べたように、(1)寛容性概念そのものの持つ権力性と、(2)他者や社会に対する無関心の表れの二つの問題がある。この二つは、政治哲学上は一つの考え方から生まれていると考えられる。

セクシュアルマイノリティに限らず、現代社会では重要とされる「多文化主義」、その主要理念である寛容性概念は、主に上記の観点から政治哲学ではしばしば批判的となって

きた。政治学者のエルシュタインは、多文化主義はマイノリティとマジョリティの間の共約不可能性（incommensurability）を助長するという。

新しい多文化主義は、哲学者の言う「共約不可能性」を助長します。それは文字通り、私が白人であなたが黒人なら、原則としてわれわれ二人は互いに話し合ったり、理解したりはできないということを意味します。二人は、うまく「やっていけ」ないので。多元文化絶対主義は、イデオロギー教育の一つの形態であり、われわれを皮膚の中に閉じ込め、文化を民族的、人種的アイデンティティと同一視します。このような過程を「分離・差別の再現」と形容した人もいます（エルシュタイン 1997:76）。

つまり、マジョリティとマイノリティとを無条件に同一視するのでは結局のところうまく「やっていけ」ないのであり、文化や人種的アイデンティティを無視して同じ空間に閉じ込める多元文化絶対主義は、その不可能性を助長してしまうのだ。チャールズ・テイラーも多文化主義の批判の中で、非黒人が黒人のアイデンティティに共感することは断じて「本当の相互承認」ではなく、それは「保護者然とした恩着せがましい態度」であるという（テイラー 1996:7）。非黒人が黒人のアイデンティティを持ち得ることは非常に困難である。インタビュー調査から見出されたセクシャルマイノリティがマジョリティの寛容性に感じられた“上から目線”は以上のことから説明できるのではないだろうか。それではマジョリティとマイノリティの対話は多文化主義を前提にした場合不可能なのだろうか。

テイラーは、対話のためには「差異に無関心であること」ではなく、「区別を維持し擁護すること」を考えねばならないとも述べている。これまでのインタビュー調査による考察から、非当事者と当事者のコミュニケーションにおいて何が重要なのかを明らかにしてきた。“友達にもそういう人いるし”、“全然いいと思うよ”、“全然大丈夫”といった語りかけが当事者に抱かせた嫌悪感は、テイラーの言う「恩着せがましい態度」という表現に該当するとはいえないだろうか。そこで「差異に無関心であること」ではない、「区別を維持し擁護する」実践が必要になる。自分と相手との間に差異は確実にある。区別を維持するためには、その差異を「受け入れよう」とするのではなく、確認しようとすることがまず第一歩である。そして、「わかるよ」とただ受け入れるのではなく、「わからない、だけど関係なくないのだ」という立場にいることが重要である。それは、「違う」という地点から相手を思う気遣いと、関係を築き上げる不断の努力をしていく試みだとはいえないだろうか。

4-3. 残された課題

これまで本論文では、「LGBT」がどのように広まり、今もなお巻き起こるブームの実態を示してきたが、メディアや教育については触れてこなかった。メディアがどのように LGBT を捉えるのか、学校教育で LGBT を取り上げることはセクシュアルマイノリティのあり方にどのような影響をもたらすのかといった今後の動向については注意深く観察することが必要であろう。論文には掲載していないが、インタビュイーからは、人々がリアリティを持って LGBT を想像するためには教育によって年少期からその存在を知らしめることが有効なのではないかとの見解が多く見られた。確かに社会規範を身につける前の幼少期から様々なセクシュアリティの存在を確認することは有効な手段であろう。古くから多くの移民が住み、「人種のるつぼ」と言われ、多文化主義政策をとっているカナダのトロントでは1988年からセクシュアルマイノリティに関するサポートや、異性愛の生徒、親、教師を含む学校を構成するすべての人を対象にワークショップなどのサービスを提供している。現在では幼稚園から小学校高学年段階で「家族の多様性」をテーマにした映像教材が使用されるなどのプログラムが見られる。こうした試みによってセクシュアルマイノリティがその存在を抹消されるといった不可視性は回避できるだろう。

だが、いかなる啓発もこれまで述べてきたような個人個人の微細な対話の実践が必要不可欠である。風間は、関係性に向き合うことはみずからの日常を問い合わせし、みずからの性/生をこれまで以上に豊かにする可能性を秘めているという（風間 2009:116）。まずは自らのセクシュアリティについて改めて考えたことのない者も、「異性愛者」と名付けることで「普通」を相対化することから始められるだろう。

¹ Oxford English Dictionary (電子版)では「LGBT」の初出および引用例は以下のようになっている。

- ・ 1992 *GayNet Digest Volume 5 Issue 617* in bit.listserv.gaynet (Usenet newsgroup)
11 Aug. In this issue:..1993 National LGBT Studies Conference.
- ・ 1997 *Advocate* 14 Oct. It sometimes seems that the university world is more open in theory to LGBT studies than in actuality to LGBT persons, scholarly or otherwise.
- ・ 2005 *Cape Etc.* (Cape Town) Feb. 85/1 Triangle Project's Gay and Lesbian Helpline is a telephone counselling service for LGBTs (lesbian, gay, bisexual and transgendered) seeking assistance or information.

なお、「GLB」については初出は以下の通りである。

- ・ 1990 Re: Am I out Yet? in soc.motss (Usenet newsgroup) 30 Sept. I bet a lot of GLB people would include having felt sexuality = sex as a major stage in their

personal histories.

- 1992 *Cornell Daily Sun* (Ithaca, N.Y.) 15 Oct. 5/1 Bill Clinton wants to turn your son gay. He advocates civil rights for gays, lesbians and bisexuals. He goes so far as to consider GLB's to be on equal footing with human beings.
- 2005 Hosp. Business Week (Nexis) 17 Apr. 24 While GLB respondents (18% overall) and lesbians (9%) think that HIV/AIDS deserves the most attention, fitness is also high on their list.

「GLBT」は以下の通りである。

- 1993 *Bisexual Identity & Community in soc.bi* (Usenet newsgroup) 9 Jan. I think that the identity and the community should be closely examined in order to give the movement and all bisexuals a strong and mature place in the GLBT community.
- 1997 *S. RAFFO Queerly Classed* 11 What do the terms gay community, gay and lesbian community, glbt community, or queer community mean to you? Where do you or don't you see these communities?
- 2004 N.Y. Times Mag. 19 Sept. 96/1 (advt.) They are joined by organizations of..gays, lesbians, bisexuals and transgendered employees, known collectively as GLBT; religious minorities; and a host of other grass-roots groups.

² 特例法=性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律

³ トランスジェンダーを「心と体の性が一致しない人」とするのは、各新聞がいつもする説明だが、「心」(ジェンダーアイデンティティ)を基準にするのは「性同一性障害」の定義に影響されたもので間違いだという指摘もある。なお、本論文では「Tは生まれた時の体の性別と違う性で生きる『トランスジェンダー』」(朝日新聞 2016.6.22) の定義を採る。

⁴ 「ピンクウォッシュ」とはもともとイスラエルがパレスチナに対する人権侵害を覆い隠すためのイメージ戦略として「ゲイフレンドリー」を自負したことへの批判を含めた表現である。

⁵ 「世界価値観調査」は価値観分析の第一人者である社会学者イングルハート(Ronald Inglehart)の呼びかけによって世界80カ国以上で実施されている調査プロジェクトであり、日本については、これまで財団法人余暇開発センター、(株)電通・電通総研、(株)日本リサーチセンター、東京大学が参画してきた。本稿の分析にあたり、石原(2012)のデータに最新のデータを付け加えた。

⁶ この場合の”レズ”は愛称として使用されているものである。

⁷ 「OUT IN JAPAN」とは、日本のLGBTをはじめとするセクシュアル・マイノリティにスポットライトを当て、様々なフォトグラファーがポートレート撮影を行い、5年間で10,000人のギャラリーを目指すプロジェクトである。

⁸ X(X ジェンダー)とは出生時に割り当てられた女性・男性の性別のいずれでもないという性別の立場をとる人々を指す。

⁹ FtM(Female to Male)とは、身体的な性は女性であるが、性自認は男性であることを指す。

¹⁰ SOGI とは Sexual Orientation(性的指向)と Gender Identity(性自認)の頭文字をとった総称である。2006 年のジョグジャカルタ宣言以降、国連の諸機関で広く用いられる概念である。

¹¹ 性別適合手術などを経て性別を移行するということ。

¹² 生まれた時に割り当てられた身体的性別と自分の性自認が一致している人を指す。

¹³ 都立写真美術館 笠原美智子氏の教示による。

¹⁴ 『3年B組金八先生 第6シリーズ (2001)』で性同一性障害だと名乗るキャラクターが登場したことでの名が広く浸透した。

¹⁵ B さんからの教示による。

【引用文献および参考文献】

アルトマン,D., 2010, 『ゲイ・アイデンティティ：抑圧と解放』(岡島克樹・風間孝・河口和也訳) 岩波書店.

バトラー,J.,1999, 『ジェンダー・トラブル』(竹村和子訳)青土社.

エルシュテイン, J.B.,2002, 『裁かれる民主主義』(河合秀和訳) 岩波書店.

ハッキング,I.,2012, 『知の歴史学』(出口康夫訳)岩波書店.

針原素子・小林・高木 2009, 「寛容性と私生活志向が社会関係資本に及ぼす効果：無関心の表れとしての寛容性に注目して」『日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回合同大会抄録』:669-670.

ハルプリン, D.M., 1997, 『聖フーコー：ゲイの聖人伝に向けて』(村山敏勝訳) 太田出版.

東優子,2016,「トランスジェンダー概念と脱病理化をめぐる動向」『こころの科学』(189):66-72.

堀江有里,2015 『レズビアン・アイデンティティーズ』 洛北出版.

石川准,1996,「アイデンティティの政治学」井上俊編『差別と共生の社会学』,岩波書店,171-185.

石田仁「富士高校放火事件の再構成」『現代思想』 43(16):231-245.

石井由香理,2012,「カテゴリーとのずれを含む自己像：性別に違和感を覚える人々の語りを事例として」『社会学評論』 63(1):106-123.

石原英樹,2012,「日本における同性愛に対する寛容性の拡大：「世界価値観調査」から探る

-
- メカニズム」『相関社会科学』22:23-41.
- Ji, Peter, Du Bois, Steve N. and Finnessy, Patrick 2009 "An Academic Course That Teaches Heterosexual Students to be Allies to LGBT Communities: A Qualitative Analysis," Journal of Gay and Lesbian Social Services 21(4):402-429.
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 2016 『性的マイノリティについての意識:2015 年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ(研究代表者 広島修道大学 河口和也)編
- 風間孝,2009,「同性愛への「寛容」をめぐって」,好井裕明編,『排除と差別の社会学』有斐閣,103-119.
- 三橋順子,2010,「トランスジェンダーをめぐる疎外・差異化・差別」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』明石書店,162-191.
- 松中権,2015 『LGBT 初級講座 まずは、ゲイの友だちをつくりなさい』,講談社.
- 牧村朝子, 2015, 「拝啓 LGBT という概念さんへ」『現代思想』 43(16):72-74.
- 森山至貴,2010,「呼称が立ち上げる〈わたしたち〉:ゲイ・バイセクシャル男性へのインタビューから」『社会学評論』 62(1): 103-122.
- 三部倫子,2013「セクシュアリティをめぐる〈マイノリティ/マジョリティ〉の〈転位〉と〈融解〉:当事者の会における対面的相互行為から」『年報社会学論集』 26:99-110.
- セジウィック, E. K., 2001, 『男同士の絆:イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(上原早苗・亀沢美由紀訳) 名古屋大学出版会.
- 志田哲之 2016 「「LGBT」から取り残されるもの:セクシュアルマイノリティにおける分断の顕在化と新たな連帯の模索」第 89 回日本社会学会大会(九州大学)性・ジェンダー(2) 報告データ
- 杉浦郁子「レズビアンの欲望・主体・排除を不可視にする社会」,好井裕明編,『排除と差別の社会学』有斐閣,103-119.
- 砂川秀樹,2015,「多様な支配、多様な抵抗」『現代思想』 43(16):100-106.
- 谷口洋幸,2016「セクシュアルマイノリティと国連」『セクシュアルマイノリティは今:現場で考える性的指向・性自認の実践と課題』 53-59.
- ティラー, C., 1996「多文化主義・承認・ヘーゲル」(岩崎稔・辻内鏡人訳),『思想』(865):4-27.
- 鶴田幸恵,2009,『性同一性障害のエスノグラフィ:性現象の社会学』,ハーベスト社.
- 辻竜平,2013, 「交際他者の多様性とその規定因:ポジション・ジェネレータを用いて」『人文科学論集. 人間情報学科編』 (47), 115-128.
- 山岸俊男,1998, 『信頼の構造:こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会.

山下梓,2012,「「不可視」から「尊重される」地域へ」『女も男も』(119):28-35.

吉野馳,2015「砦を去ることなき一繰り返し、忘れえぬ爪痕に抗して」『現代思想』

43(16) :156-167.

山下梓,2015,「多様な性を生きることを岩手から考える」『現代思想』 43(16):96-99.

Web 資料

Ipsos,2013, Same-Sex Marriage Citizens in 16 Countries Assess Their Views on Same-Sex Marriage for a Total Global Perspective (<https://www.ipsos-na.com/download/pr.aspx?id=12795>) 2016.11.20 閲覧

カイザー雪,2008,「『ラスト・フレンズ』の脚本家・浅野妙子さんのインタビュー」

(http://www.tokyowrestling.com/articles/2008/06/last_friends_3.html)

2015.12.15 閲覧

三橋順子, 2015,「続々・たそがれ日記『LGBT という言葉の起源について』」

(<http://junko-mitsuhashi.blog.so-net.ne.jp/archive/201504-8>) 2016.6.11 閲覧

多田慎介,2016,「【企業内起業ストーリー】SEEDATA の野望 第4回：今、注目を集めるトライブとは？その背景と具体的な活用方法を公開」 (<https://bn-journal.com/2016/03/seedata4.html>) 2016.12.13 閲覧

田原牧,2016,「『雑民』たちの浄化」

(<http://shinsho.shueisha.co.jp/column/shinya/004/>)

2016.11.29 閲覧

2013,「究極のラブストーリー『わたしはロランス』グザヴィエ・ドラン監督にインタビュー」(http://www.elle.co.jp/culture/interview/lawrence_director2013_09/1)2017.1.10

閲覧